

---

# 異界サイコロジック

大河内一滴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異界サイコロジック

### 【Nコード】

N4760S

### 【作者名】

大河内一滴

### 【あらすじ】

日本で順風満帆な研究人生を送っていたはずの主人公はある日突然気づいたら、違う世界で暮らすことになっていた。異世界転生、ゼロからの再スタート。それでも主人公はかまわず自分の好きな研究を続けていくのだが、周りはそれをほっとかない！？

魔界や王国、魔物や魔法のファンタジー世界で魔法にも王様にも戦争にも魔王にも興味のない学者の癒しの心理学ストーリー？

## 第1話「生れ落ちたところは（１）」

生まれ変わった！？

いろいろなことを検討した結果これが一番正しいのではないかという結論に僕はここしばらくの間で至ったのである。

もちろん不確かなところもある。生まれ変わる前の僕の中の一番新しい記憶は、研究室でひたすら文献を読み漁っていたところだから、それから急に死んだのかというのはなんだかおかしい気がする。過労死でもしたのか心臓発作でもあったのか。もしかしたら死んでいないまま転生なんていうパラドックスが起きているのかもしれない。

でもなぜか生まれ変わったと思うと納得するのだ。

別に神様から「君は生まれ変わったのだ」といわれたわけではないのだが、なんとなく僕の頭の中には生まれ変わったという認識が常識として埋め込まれているのだ。

とにかく僕は生まれ変わったようだ。

それでもいまいち確証が持てないでいるのは僕が今赤ちゃんだからだ。

正確に言うと乳児期、しかも極初期の頃と思われる。これは今の

僕の状態を鑑みた結果だ。

まず、目が見えない。

よくテレビなんかでアイドルや芸人なんかが「生まれた瞬間の記憶を覚えてる」なんて自慢しちやってるけど、あれ嘘ですから。

人間は乳児期から多分1年くらい（ここは専門じゃないからうる覚え、半年だったかな？）は目が見えない。記憶って言うのは主に視覚による情報の固まりのようなもの（もちろん視覚だけじゃないけどね）だから、その時点で生まれたときの記憶なんてものが残っているはずがないのです。ちなみに目が見えないといっても真っ暗というわけではなく、光なんかは認識できます。視力が良くないらしく、今は顔の輪郭とかがぼんやり見えるくらいだけど、発達していく上で、視力は手に入ってくる。

あと、よくお母さんなんか、赤ちゃんが私の顔を見て笑った。って喜ぶけど、実はそれは人間っぽい顔に反応して笑顔みたいな表情になるだけで、実は赤ちゃんにとっては別に嬉しいなんて感情はなかったりするとか。

まあそんな情報はいいとして、何度も言っけど僕は生まれ変わって、今赤ちゃんになってるみたいです。

乳児期には時間という概念がないはずなので、僕は今とにかく弱い意識の中、転生のことを考えたり、口に入ってくる何かを懸命に飲んだり、途切れ途切れの意識の中、何日たってるのか、何ヶ月たってるのか、あるいは何分しかたってないのか、分からない中

る。分からないなうだ。

ていうか乳児期の記憶って今まさに僕が経験しつつちゃってるじゃん！前人未到の経験を今まさに自分が！って本当ならガッツポーズしたいけど、赤ちゃんだ。できるわけない。

そんなことを考えながら薄れる意識の中過ごす僕なのだった。

これからどんなことが始まるのだろう。  
いや、マジで。

第1話「生れ落ちたところは（1）」（後書き）

## 第2話「生れ落ちたところは(2)」

早いものでそれから5年が経ちました。

いや、急展開すぎるだろうって思われるかもしれないけど本当にそんな感じなんだよ。いろいろ食べたり遊んだり寝たりぼーっとしてたりして気づいたら5歳になってたみたいな。

「物心つく」って偉大な言葉だよ、本当に。何かようやく周りのこととかいろいろ考えられるようになったなーとか思ってたら、生まれた日からもう5年も経ってるの。時の速さって本当に怖い。

「キロ、ご飯できたわよー」

お母さんの声が聞こえたから、自分の部屋からでて居間に着くと食事の置かれた机に向かい椅子に座る。今日の朝食はたっぷりチーズが乗ったパンにサラダだ、木でできた皿に載せられたそれを見るとお腹がグーとなる。今日も体調はばっちりみたいだ。

「じゃあ、ご飯を食べる前に朝の祈りをするぞ」

前に座っているお父さんの言葉に母、上の兄、下の兄も続き、僕もそれにならって口の前で右手を握り、咳き込む人のようなポーズで祈りを行なう。この世界では光の神様という1人の神様が信仰されているらしい。

祈り終わったら各自目の前にある食事を平らげていく。今日も皆話すことはいろいろある。

「お父さん、今日は仕事あるの？いつ終わるの？」

「ああロニ、今日は夜まで仕事だよ」

「そつかーじゃあ今日は一緒に晩ご飯食べれないんだね」

「ニツカ！もう一番上のお兄ちゃんなんだから好き嫌いの！」

「だってモイって美味しくないじゃん！食べたくないよ！」

ちなみにこれ全部日本語じゃない。あたりまえだけど異世界なん  
で。

たしかサンテクジ語とかいうらしい。日本的にいうと陽語になる  
のかな？生前 前の人生では僕は英語とドイツ語なら問題なく話  
せるけど、陽語はそれら2つとは違った。もしかしたら地球の違う  
場所に転生なんて考えてみたけどやっぱり世界が違う可能性が高い  
みたいだ。発音はスペイン語に近い感じだけど単語も文法も文字も  
全然違う。

この言葉を理解するのにやはり2年くらいはかかった。どうも転  
生には翻訳機能みたいなものはついて無かったようで一から憶え  
ないといけなかった。でもそこはさすがに赤ちゃんの学習機能であ  
る。人間は11歳くらいまでに覚えた言語は忘れないらしいけどこ  
れは本当なんだろう。なんとなく家族の会話を聞いてたら自然に意  
味が分かるようになった。親の教育方法も良かったのだろう。僕が  
興味を持ったものの名称を全て口で教えてくれるのだ。

「では行ってくるからな」

お父さんがそういつて玄関に立つと皆で「行つてらっしゃい」と  
声をかける。暖かな家族だ。そうしてしばらくすると2人の兄は学  
校へいってしまふ。それから午前中を僕はお母さんが洗濯や掃除を

あわただしくしてるのを見たり、部屋においてある絵本を読んだりして一日を過ごす。

サンテ大陸にあるライプチ国、そこに住んでいる一般家庭の一日はこうして始まるのだった。

## 第2話「生れ落ちたところは(2)」(後書き)

主人公の名前、家族の名前、この世界の名前を少しちりばめてみました。

次でいろいろな説明をします。

こうして1000字くらいで書いていけば、早く更新できるかも？

### 第3話「生れ落ちたところは(3)」

サンテ大陸ライブチ国 豊かな土地に恵まれ、周りには深い森に囲まれ光の神の恩恵を充分に受けた国、キロと呼ばれることになった僕が生まれ、第2の人生を送っている場所は絵本によるとそういった国である。

#### キロ・フロントル

これがこの世界での僕の名前である。フロントル一家の三男だ。1番上はニツカ兄さん、2番目はロニ兄さん、2人とも僕とはそんなに年が離れていないはずだ。二人とも明るい茶色の髪に青い瞳、何故か僕だけ黒っぽい茶色の髪に青い瞳だ。もしかしたらここだけ転生前の特性が出たのかもしれない。

お父さんはカルロ・フロントルでお母さんはルシア・フロントル。二人の印象としてはお父さんとはとても大きくてお母さんとはとても優しい。なんだか抽象的な印象だけど外見以上にそういったことが真っ先に浮かぶのだ。外見的特徴をいうと、お父さんは屈強そうな体をしていて、顔のほりが深い。お母さんは反対に丸っこい感じをして笑顔がよく似合う。

お昼までのひと時を、本を読みながら僕はこの世界に生まれる前のことを考えていた。

ここに生まれてくる前の僕は心理学者だった。名前はもうこの世界で使うことは無いからあえてここで教える必要はないだろう。とにかく前の人生での僕はいろんなことを研究していた。

人の心について、人の心の癒し方。

研究は結局中途半端になってしまったが何故だかもう一つの人生をもらうことができた。もし死んでしまっていたら研究ができないことを悔やむところだが、もう一つ分人生があると思うとどうしていいのかわからない。

とりあえずこれからどうしよう。

人生を楽しく生きるために重要なことは目標を定めることだ。と僕は考える。目標さえあれば人間はどんなことだってやれるのだ。だから前の世界での僕は全世界の人間を救うことを目標に（当面の目標はノーベル賞だったけど）人生を賭けて研究を行ってきた。まあ実際にそんな目標が達成されるわけもなく僕としてもそれを絶対に達成しようと思っていたわけではないけど……まあとにかく目標を決めることは大切なんだ。

本当にこれからどうしよう。

前の世界と同じように心理学を研究するのもいいけど他のことをやってみてもいいかもしれない。ぶっちゃけ前の世界で心理学の研究者になったのは、それしかできなかったからだ。運動神経も無く勉強も理系方向は全然ダメだった僕は必然的に文系の大学へと進みそこで心理学を学ぶようになったというだけだ。

もし人生をやり直せるのなら他のこともやってみたい！……気がする。

でも何をすればいいんだろう。前の世界では本当に研究しかしてなかったから趣味なんてないし、得意なものも前述したように何も無い。このままじゃ前の世界と同じように、なんのとりえの無い人間になってしまう！

よし決めた！

この世界では前の世界ではできなかった人生を送るぞ！

まずはそのためにこの世界がどんな世界なのかをもっと知ろう。

「キロ！そろそろ昼ごはんにしましょう！」

……とりあえず、お母さんの作ったごはんを食べよう。話はそれからだ。

### 第3話「生れ落ちたところは(3)」(後書き)

ちなみに作中で理系がダメだから心理学を学んだとかいてますが、心理学って分類は文系だけどがつつり理系が得意じゃないとできなかったりするらしいです。結構数学的なこと使っらしいです。

#### 第4話「魔法と科学（1）」

とんでもないことが判明しました。

なんとこの世界には魔法というものがあるという事実。

これマジだよ！僕の頭がおかしくなってるわけじゃないからね！  
……異世界に転生してる時点でおかしいかも知れないけど……そこ  
を取っ払えば僕はいたって普通の男の子なんだから、現実認識はち  
やんとできてるはず。

ちなみに魔物も魔王も魔界なんてのもあるのかなんとか。これは  
別にどうでもいいっちゃどうでもいいけど。

とにかく魔法があって魔法を使うことができるって事が今日の一  
番重要なポイントだ。

なんでそのことを発見したのかというと、それはある日昼ごはん  
を食べたあとのことである。

近所の家に住む、お母さんの友達が娘と一緒にやってきたのだ。  
なんでもお母さんとは妊娠してるときに知り合って意気投合した  
という、前の世界でいうママ友というやつらしい。娘は僕と同一年  
で僕より半年ほど早く生まれたんだとか。

とにかくお母さんのママ友はお母さんと二人で談笑するらしく、「

リア、キロ君と遊んでらっしゃい」との一言で、僕とその娘は僕の部屋で遊ぶことになった。

「わたしリアっていうの、私のほうがキロより半年早く生まれたからお姉さんって呼んでいいわよ」

初対面にしてはぶしつけな言葉だが、5歳といえど大人っぽい方だろう。実際には僕のほうが一回りも二回りも年が上だったりするけど。

「よろしくねリアちゃん」

「お姉さんって呼びなさいって言ってるでしょ」

頬を思いつきりつねられた。めちゃくちゃ痛い。

「ひあおねへちゃん」

「もう一度」

そうして、つねつてた指を離すともう一度「リアおねえちゃん」と言い直させられるのだった。

「私が本を読んであげるね」

幼児期の女の子はとにかく誰かを世話したりするのが大好きである。

この現象は2つの理由から導き出すことができると僕は考える。1つは普段同姓であるお母さんが自分や他の家族を、また洗濯や掃除、料理など世話している場面を見て真似をしたくなるからである。成長というのはまず大人の行動を真似する段階から始まる。なのでこうして身近な同姓であるお母さんが誰かを世話している姿をみて、自分も真似をしたくなるのだ。

2つ目は誰かを世話することによって自分の居場所、いわば安全

基地のようなものを作り出すのだ。親子関係でいうと子どもは親に世話をされることによって親という安全な存在を得るが、同時に親も安心して世話をすることができるといふ安全な存在を手に入れることができる。子どもは安全な存在を多く手に入れるため、自分より弱い存在には世話をする傾向になる。

もつともこの2つの理由は僕が考えたことなので実際には違いかもしれない。

もつと幼児期の児童の特性を調べた上で検討してみる価値があるなと考えたところで右の頬に急に痛みが走った。

「キ口、私のお話聞してる？」

「しゅ、しゅみましえん！ひいてにやはったです！」

すみません聞いて無かったです。どうやら僕は考え事に夢中になってしまったようだ。

#### 第4話「魔法と科学（1）」（後書き）

いきなり話が飛んでる感じがいなめません、そして魔法の話はどこへいった？となると思いますが、それは次の話でします。

今回も変な無駄知識みたいなものを入れちゃってますが、私の適当な考えですので真に受けなくてください。

一応1つ目の理由は子どもの成長の過程、2つ目の前半部分は親子の愛着関係を元にてきとーに考えたものです。興味がある方は調べてみると面白いのでは？

読み飛ばしていただいて大いにけっこうです。

## 第5話「魔法と科学（2）」

「もう！ちゃんとおねえちゃんが読むお話を聞きなさい！」

リアはそういともう一度僕のために本を読んでもくれるようだ。

今度は頬をつねられないためにも真剣に聞いた。

彼女の幼くあどけない口から拙いのはつきりとした言葉が紡ぎ出される。それは一つの文章となりやがて大きな大きな物語へと変貌していく。

それは国を守った王子様の物語だった。

隣の国が魔物の攻撃を受け、魔王の支配下に置かれた。そして自分の国にまでその脅威が伸びてきたとき、王子は決断した。

この国を守るのは自分しかない。そう思った王子は軍を指揮して隣国へ侵攻。魔物達をしりぞけ、やがて魔王と対峙し、討ち滅ぼしたという話であった。物語のラストは、助けた隣の国の姫と結婚し国を守った『勇者』として生涯を幸せに暮らしたという。

「どうだった？」

リアがそう聞いてきたので僕は素直に「聞きやすい、綺麗な声だ」

と答えた。

「違うわよ！本の内容！」

リアが顔を真っ赤にして否定した。なるほど、そっちだったか。

「それにしてもいいなー、わたしも勇者みたいに魔王を退治してみたい」

「ええっ！そっちなの？お姫様のように助けられたいじゃないの？」

「だって私はお姫さまじゃないから助けてもらえるはずないじゃん。『勇者』なら誰だってなれるし」

リアはそういいながら本を棚の中になおした。

「それともキロが勇者になって私を助けてくれるの？」

「無理だよ。だって僕魔法も使えないし剣も握ったことないし、そもそも襲われるような魔王もいないじゃんか」

本に出てくる王子様は魔法の腕も剣の腕も国の中で彼に並ぶものがいなかったらしい。そんな御伽噺の存在に僕がなることは無理だ。子どもらしくないかもしれないけど僕は根っからの現実主義なのだ。「そんな魔法と剣は今から鍛えればいいよ！魔王はーもういないけどせめて魔物から私を守ってよ」

リアがテンション高くそういった。というか先ほどのお姉ちゃん設定はなんだったのだろう。すぐ役割が変わるのは子どもの特徴だ。「リアのほうがお姉ちゃんなんでしょ？お姉ちゃんが僕を魔法で守ってよ」

仕返しに僕はリアに対して意地悪を言ってみた。リアは難しそうな顔をしてこっちを見つめた。

「うーん……私はまだ指に光を灯すくらいしか魔法使えないもん」  
そういつてリアは付け加えた「あ、でも目くらましくらいはできるかも」

うん？

使えるの？魔法？

「リアって……その……まほーを使えるの？」

「使えるよ！見てみる？」

そう嬉しそうに答えながら僕の返事をまたずに僕の目の前に人差し指をつき立てた。

「今から使うからねっ！見ててよ」

そういつて彼女は深呼吸すると自分の指先を見つめ、力を込めるように体全体を一回震わせると静かに綺麗な声でつぶやいた。

リーテ

すると人差し指の先がほのかに明るくなり、次第にそれは徐々に大きな光となり、リアと僕の顔をまばゆく照らし出した。

「……ふう。上手くできたみたい、綺麗でしょ」

そういつてリアは嬉しそうにはにかんだ。

ま、マジか！？

えっ魔法、使えるの？この世界？  
もしかして魔物もいちゃうのこの世界？

## 第5話「魔法と科学（2）」（後書き）

この世界最初の魔法は光魔法でした。

一人称視点の小説って意外に書くの難しいですね。

感想とか評価をしていただければ嬉しいです。

## 第6話「魔法と科学（3）」

「お母さん！お母さん！」

急いで部屋を飛び出した。そのままお母さんとリアのお母さんがお話しているところへ飛び出した。お母さんとリアのお母さんはまだお話の最中だったようで飛び出てきた僕を横目に見ながら話を続けた。

あ、お菓子食べてる。ずりいー。

「どうしたのキロ」

話がひと段落ついたのか、お母さんは僕を抱きかかえると　さすがに心は大人だからちよつと恥ずかしいし照れる　僕の顔を覗き込み優しく話を促した。良いお母さんだ。

「あのね、お母さんも魔法を使えるの？」

「どうしたの？急にそんなこと聞いて？」

「リアがね、魔法で光を出して見せてくれたんだ」

「ああ、そういうことね。私だって料理や洗濯物を乾かしたりするときにちよつとだけ使ってるのよ？」

お母さんも使えたんだ！というか普段から使ってるみたいなのに僕が見落としてたみたいだ。

最初は演技で子どもっぽくしようと思っていたが、そんなことは無いいつの間にかお母さんに甘えることができるようになった。決して僕の精神年齢が低くなったわけではないと信じたい。お母さんが甘やかせ上手なんだ。

「あら、私なんてこの子と同じで光くらいしか出せないわよ。料理の時には使ってみたのだけど下手だから料理を焦がしちゃって」  
リアのお母さんも笑いながら話に参加する。見るといつの間にかリアもこっちに来てて、リアのお母さんの膝の上でこっちを向いて微笑んでる。なんか上から目線っぽい。

「あらそのときはこういう風に魔方阵を書いてみたらいいのよ」

お母さんがその話に答えて、机にあった紙で魔方阵を書く。そこから料理の話や洗濯の話など、主婦の苦労話にしばらく入っていったがあわてて僕は話を切り替えた。

もう一つ聞きたいことがあったんだ。

「この世界って魔物がいるの？」

「そうよ、だから街の外には出ないようにって言ってるでしょ？」

どうやら街の外には魔物がいるらしい。ただ1人で外に出ないように注意してるのかと思ってた。

「本当に？」

「こんなことにお母さんは冗談はつかないわ」

「本当の本当に？魔物ってどんな感じなの？」

そんな僕の質問にお母さんは優しい顔をして答える。魔物にはいろいろな種類があつて、人懐っこく可愛い魔物から獰猛で危険な魔物まで。総じて何らかの魔法を使うことができるのか。

「もっと詳しいことを知りたいならお父さんが帰ってきたら聞いてみなさい」

なんとお父さんは軍人だった。

街を魔物から守ったり、街の人を護衛する仕事をしているらしい。

「お父さんは魔物と闘ったりしたことあるの？」

夕食の席で昼間の話になりその流れで僕はお父さんに聞いてみた。  
お父さんはお酒の入ったコップを傾け中のものを飲むと答えた。

「ああ、何度もあるぞ」

「怖い魔物とかいるの？危なかったこと無い？」

「そうだな、中には危険な魔物もいるが、この街の近くは比較のおとなしい魔物ばかりだよ」

そういつてお父さんは笑うと「キロがもう少し大人になったら外へ連れてつてあげよう」と僕と約束をしてくれた。本当に優しくて子ども思いの父さんだ。

「そういえばこの子今日魔法をみてすごく興奮してたのよ」

お母さんがお父さんに今日あった事を離した。

「なんだ、キロはまだ魔法を使ったことが無かったのか」

どうやらこの世界は誰でも気軽に魔法を使うことができるらしい。

「うん、僕魔法を使ってみたい！」

「じゃあ俺の使わなくなった魔法の教科書をやるよ」

今まで話を聞いてたニツカお兄ちゃんがそうだった。

「本当に！ありがとう！」

そう答えた僕をみて「今日のキロはテンションが高いな」と皆が笑ったのだった。

ついに僕は異世界で魔法デビューをするようです。

## 第7話「魔法と科学（4）」

魔法とは人体を構築する元素の一つである魔力を用い、それを式によつて異なつた元素に変換し違つた作用をもたらすことが可能となる。我々人類はその類まれなる英知と培つてきた多くの歴史により今日までに多種多様な魔法を獲得してきた。そしてそれは今も変わらず、常に新たな魔法を生み出していくのである。

　　魔法に足を

踏み入れし者のための魔法学より抜粋

これが子どものための魔法入門書なら、この世界の子どもはどれだけ頭が良いんだろう。

あらずじを読んでみてそう思ったのだが、魔法を使えるようになるためだと思い我慢して読み進めた。

ニツカお兄ちゃんから魔法の教科書をもらつて早速次の日から読み始めた。ニツカお兄ちゃんがくれた魔法の教科書はニツカが学校に入つたときに使つてたものだが、何らかの理由で新しい教科書に変わったため必要なくなったそうだ。多分この教科書が難しすぎたからだと思う。ニツカにとっても難しかったのか、教科書のところどころに落書きが描かれている。

前半は魔法がどのように発展してきたかの歴史。そして魔法の原理について中盤に書かれ、最後は魔法の式を構築するための言語を理論立てて説明している。前の世界でもこういったものは大学にいつてから読むものだと思う。

とりあえず何とか読み進めていって魔法の原理については理解した。この世界での魔法というのは、体内にある魔力と呼ばれえる力を式で光や炎などの力に変換し、それを使用することができるという代物だ。

## 魔力×式＝魔法

数式で表すとこんな感じだろう。

式には魔法言語を使う。呪文だったり魔方阵だったりするがどちらかというと呪文で使われることが多いようだ。発音はこの世界の言語と変わらないが、単語の構成と文法のようなものがまったく違って、正直意味が分からない。この本には単語と構成の意味についてかなり詳しく書いてあるがそれでもなんとなくでしか分からず、これを子どもが理解できるとは到底思えなかった。

「さて」

実際に本を読み進めて、ついに魔法の使用の方法までついた。そこには魔法の使い方について特に堅苦しい言い回し方で描いてあり、初級魔法をいくつか紹介してあった。簡単に使い方を説明するとまず起こす魔法をイメージしながら呪文を唱え（魔方阵の場合は描く時にイメージする）そして魔力を任意の部分（手や指先など）に集中させるということだ。とりあえずイメージしながら呪文を唱えれば魔法が使えるらしい。こんなに簡単でいいのか？

そしてついに魔法を使う時がきた。

どれを使ってみるべきか本の中からしばらくの間選び、簡単な炎魔法を使うことにした。

やっぱり始めて使う魔法なら炎魔法だろ。ドラクエ的に。

もともと初級なので指先に火を灯すことくらいしかできないみたいだが。

この世界で、前の世界には無い魔法を僕は使う。

指先を見つめる。

ローソクをイメージする。

イメージする。

イメージする。

今だ！

そのまま口を開き単語を唱える。

「……フィル」

しかし指先に火は灯らなかった。

## 第7話「魔法と科学（4）」（後書き）

いきなり初級魔法につまづく主人公です。

## 第8話「魔法と科学（5）」

えっ

あれ？

「……フィル」

指先を見つめるも何の変化もしない。

「フィル…… フィルフィルフィルフィルフィルフィル  
フィル」

何度も何度も

何度も何度も

呪文を唱えるが、指先からは炎は出なかった。

なんで？

魔法が出てこないよ？

変な汗が出てきた。

落ち着くんだキロ！まずは個々の行動から失敗の原因を探すんだ。  
炎のイメージはちゃんとできてたよな？ うん。単語の発音は？

間違っていないはずだ。魔力はちゃんと指先に集中させていたし

……

……って魔力ってなんだよ！？

根本的な問題に行き当たってしまった。そうだ、うつかりしていたが僕は魔力についてまったく知らなかった。それなのに魔力を集中させようとしても意味無いのは当たり前だ。

じゃあ魔力ってなんだよ。

そう思って教科書を何度も読み直したが魔力は魔力としか書いておらず、どうしたら自分の魔力を感じ取ることができるのかがまったく書かれていない。むしろ魔力なんか当然あるもので感じ取るようなものではないというような感じの書き記し方だ。

「もしかして僕には魔力が無いんじゃないか」

独り言をつぶやいてみた。この世界に生まれてからはめったに言ったことが無かったのに。

もしかしたら異世界から転生したから僕には魔力が無いのではないだろうか？それなら僕が異世界に転生した意味は何なのだろう。というか魔法が日常で使われるようなこの国で魔法が使えないと分かったらどうなるのだろう。家族に見捨てられたりはしないよな。

静かな部屋の中、独りいろんなことをつぶやいては魔法の言葉を

唱え続けるのであった。

「…………キロ、キロ！」

突然大きな声が聞こえてびっくりすると、後ろにはお父さんが立っていた。どうやら何度も僕の名前を呼んでいたようだ。部屋の中はもう真っ暗になっていて、お父さんは仕事から帰ってきていたのだ。

「キロ、晩飯の時間だぞ。ずいぶん集中していたようだけどどうした？」

お父さんが問いかける、その瞬間なんだか先ほどまで考えてたいろんな不安が飛び出してきて、思わずお父さんに抱きついた。

「お父さん、僕魔法使えないの？魔力がもしかしてないのかな？」  
ちよつと泣きそうな僕、やばい、涙声だ。

僕はお父さんの顔を見上げながら今日魔法の練習をしたこと、だけどまったく魔法が使えないこと、魔力というのが何のことなのかまったく分からないことを必死で伝えた。支離滅裂で自分でも何をいつてるのかまったくわからないけどお父さんはずっと僕の話聞いてくれた。

「そんなことはないさ。魔力は誰にだってあるんだよ」

しばらく話を聞いた後お父さんはそういつて僕の頭を撫でると、魔力について優しく教えてくれた。どうやら魔力というのは体力と

同じものらしい。だから力を込めるとその部位に魔力は自然とたまっているという。あと体力と同じなので、使えばバテるがしばらくすれば回復するのだとか。そこらへんはドラクエとは違うようだ。

「キロ、お前は炎魔法を出そうとしていたんだな？じゃあ他の魔法を試してみよう。まずは光魔法を試みたらどうだい」

そういうとお父さんは僕の手をそつと握りながら指を立てたままの手を支えた。

「そう、目をつぶってまずは光をイメージするんだ。昨日リアちゃんに見せてもらっただろ？それを心の中で思い出して。……自分の指先に光があるように……ゆっくり指に力を入れて……指先から何か暖かいものが出てくる感じで……そう、そのままそのまま……よし、それじゃあゆっくりと呪文を唱えてごらん」

リーテ

すると急に目の前が明るくなった。

目を開けると確かに僕の指先には輝くような光が出来上がっていて、それが僕の部屋一面を照らし出していたのだ。

ついに始めての僕の魔法が目の前に現れたのだ！

あとで聞いてみると、僕の炎のイメージがまだ充分ではなかったから魔法が使えなかったようだ。炎魔法は具体的な熱さや動きまでイメージしないといけないので最初にするには難しいのだとか。

とにかく、これで僕は魔法を使えるということが1日かけてようやく分かり。この日の僕の泣いた顔の真似がしばらく皆の間でネタにされるのだった。

## 第8話「魔法と科学（5）」（後書き）

ちょっとだけ長くなりました。

転生したくせに主人公が幼く見えますがこれは転生したことで精神が幼くなったというより、子どもという身体的特徴に精神が指示されているというのが私の考えです。ちょっと意味が分かりづらいと思いますが、そのうち説明します。

あと魔法はもう一つの作品「憂鬱な魔術師」に出てくる魔法とはなんとなく同じようで違います。こっちはすっごくシンプルに体力と同じ扱いです。

向こうは大雑把に言ってしまうえばハンターハンターの念のようなものだと思います（笑）。

## 第9話「魔法と科学（6）」

### ファイル

指先に力が伝わり指先が熱くなる。そしてその力は体の外に放出され「ボワッ」という音とともに指先に炎が誕生する。大きさはローソクくらい、儚げだがしっかりと消えることなく存在している。

「すごい！本当に火がついたよ！」

リアが目をまるくして驚く。頬はいつもにまして真っ赤で炎に照らされた顔は子ども特有のあどけない可愛さが際立っている。チークいらずだ。

翌日から練習をし始めて1週間後には初級の魔法なら火も水も光も風も起こすことができるようになった。

やはりイメージのしかたが悪かったようで、具体的にイメージをするように心がけたら簡単にできるようになった。イメージは一日中外に出てみたり、川にずっと手を付けてみたりしたら意外に簡単に具体的にできるようになった。火を触ろうとして火傷してお父さんにビククリするほど怒られて泣いた。

この世界では科学というものは発達していないようだ。というかどうかやら物質一つにしても存在の仕方が前の世界とは異なるみたいだ。

具体的なイメージと聞かれて、自然に前の世界のイメージで火ができるには酸素が必要で、風は温度による気圧の変化、水は水素と

酸素なんて思ってしまったが真面目な顔をして「酸素のイメージってどうするの？」と聞いたら意味の分からないような顔をされた。兄達に若干引かれた。

どうやら「水は水」「光は光」という観念であり、魔力元素というべきものでこの世界は構成されてるようだ。じゃあ状態変化とかはどうなるんだと思うけど、正直そこらへんは専門外だからあまり興味ない。

つまりすつごく大雑把にいうと「神が万物を創造した」というのが現実になってる世界のようなのだ。ただそれを神というのかどうかは分からない。

したがって自然科学という分野は発達していないようだ。人は人、魔物は魔物であり、行動は研究してもその原理を追求することは無いんじゃないかな。前の世界で専門だった心理学という学問が無いだろうということはちょっぴり悲しい。

と、ここまでがお父さんからイメージについて説明を受けた僕なのりのこの世界に対する考察だ。

今、僕はリアと一緒に魔法を使えるようになるための練習をしている。ここ2、3日はリアが家に遊びに来て、そこで魔法を使って遊んでいるのだ。

「私も風を操れるようになったよ！」  
そういうとリアは僕の顔に向けて手を向けた。

ウィン

突風が僕の顔を襲い、髪の毛が一気に後ろへなびいた。

「あははっ！キロが驚いた顔してる！」

「やったな！」

すぐさまリアに指を突きつける、手はピストルの形にして、イメー  
ジは水鉄砲だ。

アクウ

指先から放たれた水は綺麗な弧を描き、リアの顔に命中した。よ  
っしゃー！

「ははっ、顔びしょ濡れだよ！」

「もうキロ！お母さんに言いつけるからね！」

リアはブンブンといった感じで怒ると、部屋から出て行った。

それにしても

この世界に来てから僕は結構感情豊かになったと思う。今のやり  
取りだって演技をしている訳ではなく自然に笑っているし、泣くこ  
とも多い。怒鳴られただけで涙が出るなんて前の世界で子どもだっ  
た時以来だ。やっぱり子どもに戻ってるからかな？

もし前の世界だったらこのことについて研究してるかもしれない  
な。

まあ今はそれより魔法をいっぱい使えることのほうが興味がある  
けど。もう1歳年をとれば学校でいろいろな魔法を習うことになる  
のだ。すっごいワクワクする。

もちろんとりあえず今はお母さんに怒られたときのために心構え  
をしておかないと。

## 第9話「魔法と科学（6）」（後書き）

とりあえずこれで「魔法と科学」は終わりです。個人的にはやっとプロローグが終わった気持ちです。

タイトルに書いていながら科学についてあんまり触れてない上に、科学は無いって言い切ってしまいました。文系なので科学についても適当です。

## 第10話「反抗心と癒しの魔法（1）」

「どうしてできないの!」

先生から怒られる。

場所は放課後の教室。

生徒の反応は好戦的というか問題にしていけないといった感じで視線は向けているが、先生の目を真剣に見てはいない。心底どうでもいいという感じだ。

「だって嫌なものは嫌だもん」

魔法つまんねー

学校に入って6年、僕の魔法に対する興味はほぼ完全に失ってしまった。

正確にいうと学校で習う魔法に興味がなくなったのである。

6歳から学校に通うことになった。

ライプチ国ルノー魔法学校。

ライプチ国は小さい国で、前の感覚だと1つの大きな町のように。もちろん回りに領土としてある町があるにはあるが、それらをあわせても1つの小さな県になるかならないくらいだ。その中で学校は3つしかなくそれぞれのレベルは多少しか違いが無いようだ。義

務教育ではないので子ども全員が入ることができるというわけではない。

実は僕のお父さんは軍人でも結構偉い人だったようで、3つの中でも比較的に軍の上層部や王室関係者等が多い学校に僕は入ることになった。もちろん兄達も同じだった。

それでも最初の3年くらい、魔法の授業は楽しかった。いろいろな魔法を習得し、どんどん強力な魔法を使えるようになってテンションが上がった。幸い僕は魔法使いとしてのセンスがあるらしく、どんどん上達していった。

ちなみに魔力は体力と同じというものだったが、じゃあ体力をつけければ魔力が上がるのかというと半分正解である。なので魔力を上げるためには体力トレーニングを行なうのだが、それは持久走だったり筋トレだったり前の世界と変わらない。

しかしそれでは鍛えれば鍛えるだけ魔力が上がって個人差が出ないと思うだろうが、そこは魔力の消費量に出てくる。つまりドラクエ風にいうとメラをMP3で使えるかMP2で使えるかという差だ。これは生まれもっての才によって決まり、鍛えることはできない。だから低魔力で消費できる人と高魔力を消費してしまう人とは同じ体力でも使用できる魔法の種類と量が格段に変わってくるのだ。

もう1つ体力の回復スピードがあるが、それは敢えて言及する必要はないだろう。

僕は体力は平均ほどだったが、魔力消費量が普通の人より低いらしく、魔力切れでバテることは無かった。

問題は学校に入ってから4年経ってからだった。いや、そもそもの原因を考えていけば魔法以外の授業にもあったのかもしれない。

学校に行くということはどいうことか。

それは自分の将来に必要な技術・知識を手に入れるため。また自分の知識欲を高め研究をするという理由もあるだろう。

この世界の学校は将来に必要な技術を手に入れるためという意義が特に大きくある。特にルノー魔法学校では軍の上層部や王室に係の深い子どもが入るため、必然と教育方法も彼らに沿った内容になってくるのだ。

特に戦闘訓練が占める割合は多いのだ。

魔物から身を守るため、賊を退治するため。

そして敵国へ攻め入るため

また魔力を効率よく高め、魔法を研究するためにも戦闘訓練は重要な教育方法であると定義付けられている。将来はそこから軍人になるために更なる訓練機関へ進むものも多い。

授業で学ぶ魔法も戦闘用の魔法が増え（というか全ての魔法が戦闘を元に作られていると言っても言い）とうとう4年目からは魔法での戦闘訓練が始まった。

僕はそれがとても気に食わないのだ。

何故人を傷つける魔法を学ばなければならないのか。

いつのまにか僕は魔法を心底つまらなく感じるようになった。

## 第10話「反抗心と癒しの魔法（1）」（後書き）

新しい話はシリアスな展開から。

「ん？」って思う人もいると思いますが作者も「ん？」となっていてそこをどうやって解決できるかが今後の課題です。多分また書き直すかもしれません。

主人公がいい感じで悩んでいます。というか反抗しています。これから厨二病に入ってくるのではw

この話では作者の課題として、前の世界でのアイデンティティー（書き辛い）とこの世界でのアイデンティティーの確立との葛藤とかを考えてます。上手く表現できればいいけど多分できないので気にしないでいいと思います。

アイデンティティーという単語が気になる人は調べてみると面白いかもしれません。

## 第11話「反抗心と癒しの魔法（2）」

「なんで攻撃しないの？」

場面は戻る。

放課後

教室

教師と僕

つい先ほど戦闘訓練の時間があつた。一对一の魔法を使った戦闘でいつものように僕は攻撃をせず逃げては避け、防御をずっと繰り返した。相手は怒っていたがそんなこと知ったこつちやない。

「だって攻撃したくないんです」

質問に対する答えではない。僕の決意を表明したのだ。先生は困った顔でこつちを見る。そういう顔をされると僕としても迷惑をかけたくは無いので困ってしまう。でも攻撃したくないのはしょうがないじゃないか。誰かを傷つけるなんて僕には無理だ。

「でも攻撃しないと評価にならないのよ？」

その答えに僕は何も答えることはできない。というか答えない。先生は長い髪を掻き上げるとそつとため息をはく。先生はリシユナ先生といって1年の時から僕のクラスの担任だ。とても綺麗な先生で前の世界という美人教師という感じだ。まあここでもその表現は間違っていないけど。金髪蒼眼の魅力的な先生はしばらく僕を見つめるとさらに言葉を続けた。

「……ふう、しょうがないわね。でもこのことはお父さんに報告しておくわよ？ キロ君はお父さんのようになりたいと思わないの？」

リシユナ先生は再度僕に問いかける。

お父さんのような軍人になる。

まだ、お父さんが仕事をしているところを見たことない僕は実感が湧かないことを先生に伝えると「それもそうよね」と先生は苦笑してその日の説教は終わった。ルノー魔法学校は軍関係者の教師が多くリシユナ先生も元々は軍で働いていたらしい。お父さんとは知り合いなのかもしれない。どんな報告をされるのか、そしてお父さんからどんな説教を受けるのか戦々恐々だ。

もちろん義務教育ではないので退学もありえる。学校は前の世界でいう国立で全て王国で管理されているから、退学になると武官や文官などの王国の重要役職にはつけないだろう。僕は辞めてもいいやと思っではいるが親はどう思っているか分からない。

「終わったなら一緒に帰ろう？」

どこかの国のお姫様と言っても疑われないような可愛い女の子に

声をかけられた。

亜麻色の髪は腰まで届くほど長く流れるように軽やかで、透き通るような白い顔は女の子なら誰だって羨むだろう。琥珀色に輝く瞳で微笑みかける姿は最低でも貴族のご令嬢といたくらいだろうか。ロリコンなら眼にただけで興奮するだろう。僕はロリコンじゃないけど。

というかりアだった。

彼女はなんと本当に貴族のご令嬢だった。

確かに子どもの頃から良いものを身に着けているなと思ったけど、そういったものに無頓着な僕は学校に入るまでまったくそのことに気づかなかった。そういうわけで僕と同じくルノー魔法学校、同じクラスに在籍している。

「先生にこつてり怒られたよ」

なんと返せば分からずに一緒に歩き、何気なしにさっきのことを言った。こつてりは誇大妄想だが何でも大きく話したがるのは子どもの癖だろう。その流れで先ほど話した内容をリアに話した。リアはニコニコしながら聞き。

「だってキロが魔法全然ダメだから怒られるのはしょうがないよ」

かるーく毒を吐かれた。

リアは僕が攻撃魔法を使わないのは、魔法ができないから使えないのだと思っているらしい。確かに興味が無いから勉強していない

のは確かだ

「うっ……俺は魔法ができないわけじゃなくて使わないの！」

「はいはい、今度の休日はお勉強会だね」

リアはやれやれとでも言う風になぞ告げる。子どもの頃の魔法の練習は今では僕のための魔法訓練へと変化を遂げつつあるのだ。非常に嫌だ。

そして事態は次の日のちょっとした事件へと移る。

## 第12話「反抗心と癒しの魔法（3）」

その前に少しだけ話をしよう。

発達心理学者であるエリクソンは生まれてきてから死を迎えるまでの人生の期間を8つに分類した。大まかに言えば、赤ちゃん、幼児、子ども、少年、青年、大人、中年、老人、といった感じだろうか。そしてそれぞれの期間において人間は課題を持っていて、その課題をクリアしないといけないと唱えた。

例えば青年の時の課題は将来を考えることである。そのために自分が何をしたいのか、何ができるのかを知らないといけない。

赤ちゃんであれば、初めて迎えた人生をどうやって生きるか。老人であれば、残りの人生をどう生きるか。そのときの段階で実に様々な課題がある。

エリクソンによると今の僕の、子どもの時期の課題は勤勉性であるという。

しかしその勤勉性とは学校の勉強ではなく、社会的な勉強である。僕なりの解釈で簡単にいってしまえば友達を作り、集団の中で生きる能力を学ぶということだ。

友達と行動を共にし、評価を受けることによって自尊心を手に入れることができる。しかし逆に友達との関係が良好で無かったり、評価を蔑ろにされると自尊心を失い劣等感を覚えてしまうのである。

なぜこの話をしたかというところで今の状況について説明しよう。

放課後

訓練場

僕と他3人

昨日とは放課後ということ以外合っていない状況だ。3人は同じクラスの人で、1人は昨日の戦闘訓練で僕と戦った人だ。昼休みに呼び出され、こうして放課後に訓練場に集まることになった。3人とも男だから愛の告白ではないようだ。  
残念。

端的に今の状況を表わすならいじめというものだろう。

まだ訓練場に着たばかりだからいじめかどうかは分からないが、僕を囲む3人は明らかに怒気と嘲笑、卑下を含んだ表情である。昼に呼ばれたときも「来ないと殺す」と言われたし、今だって訓練場の建物内に誰も入ってこないようにカギを閉められている。どう考えてもこれから仲良く話し合う雰囲気ではない。  
愛の告白なんて妄想を考えるまでも無かった。

「おいチキン野郎」

1人が僕に向かって攻撃的な言葉を放つ。昨日対戦した奴だ、名前は確かトニル・フィルデール、フィルデール侯爵家の3男だったはずだ。体格が良く短く刈り込んだ髪を無駄に掻き嘲るように

笑う様は悪く言えばデブのムカつく野郎という感じだ。

「お前闘う気が無いんなら学校に来るんじゃないやねえよ！ 家でおとなしくビビッてる！」

そう言っただけを軽く押す、押された僕は少し後ろに座り込むように倒れ、上から3人の笑い声が上がる。僕はこういつた相手をからかったり、攻撃的に接する人間の心理はまったくと言っていいほど分からないが、多分何かでイライラしているのだろう。しかしそれを僕にぶつけるのは間違いだ。

「僕も学校は辞めてもいいと思ってるんだけど、親の許しを得るのがめんどくさいんだ。そう思って放っておいてくれると助かるんだけどいいかな？」

立ち上がりながらそう返す。学校に来るなという意見は最もだから素直に受け入れた。

3人は一瞬きよとした顔をするともみるみる機嫌が悪くなっていった。茶化されているとも思っただろう、素直に答えただけなのに。

もっと違った状況なら何とか相手をなだめて良好な関係に戻そうと思うが逃げられない状況まで作られているのだ。このいじめはある程度まで突き進むだろう。それならさっさと爆発してもらってやることをされたら（僕に対する攻撃だ）早く終わってほしい。そう思いながらトニルを見ているとまだ何か言いたいらしい。

「女に守られていい気になりやがって！」

は  
あ  
？

## 第12話「反抗心と癒しの魔法（3）」（後書き）

前半の話はいらないんじゃないかと思いますが、書いてしまったのでそのまま投稿です。

実際にエリクソンという学者はいます。発達段階は結構重要な考え方ではないかと思えます。興味ある方は調べてみてください。ググればいっぱい出てくるんじゃないかと。

ちなみに発達段階の分け方と名称、発達課題はもっとちゃんとしたものです。ここに書いたのは私が発達段階を基に適当に考えたわけ方や課題です。

よろしかったら感想と評価をお願いします。

### 第13話「反抗心と癒しの魔法（4）」

「ごめん、言ってる意味が分からないからもう少し詳しく言ってくれないかな？」

本当に意味が分からなかった。僕が女の子に守られていた場面なんて今まであっただろうか？ いや、それ以前に何かから守られるほど危機的な状況に陥ったことがない。そもそもそんなに女の子と仲良くないから接点なんて無い。

「とぼけんなよ、いつもいつもリアちゃんと一緒にいるじゃないか！」

トニルの右横にいたひよろつとした細身の男の子が叫んだ。確かシャリツチ……家名のほうは忘れた。

「女の子とベタベタしやがって、気持ち悪いんだよ！」

トニルの左横にいたチビも後に続いた。ごめん、名前は忘れた。

「と、とにかく女といちゃいちゃして、攻撃もできないような軟弱な奴は俺たちがこの学校から追い出してやる」

トニルがそう締めくくった。

なるほど。

ここにきてようやく彼らが僕を敵視している理由が分かった。つまり彼らは僕がリアと一緒に学校に登校したり下校したり、お昼ご飯と一緒に食べたり（これは毎日ではないけど）してるのを見て、

僕とリアがいちゃいちゃ付き合ったりしてると思ったのだろう。それでなんとなく僕を許せなく思っていて、その上訓練での僕が逃げ回ってばかりだからイラついたのだろう。確かに僕も本当に精神まで子どもだったらそんな奴いたらム力つくかもしれない（最近忘れがちだが僕はこう見えても精神年齢的には中年のおっさんだ）

つまり彼らはリアのことが好きなんだろう。

好きとは言わないまでも、気になってしょうがない。可愛いから気になって、けどその気持ちがどういう意味か分からない、でも気にしないようにしようと思うとどんどん気になってしまふ。かといって話しかけることはできないし、そんな自分を想像できずについ乱暴な気持ちになってしまふ。

初恋未満の、名前をつけるとしたら淡恋とでも言えいいだろうか。この時期の男の子特有の気持ちを彼らは今、まさに経験しているのだろう。

「うわぁー若いなー」

思わずおっさん思考の感想が漏れた。最近は何んだかこの世界にもこの子どもという体にも精神が慣れてしまつて、つい子どものようにしてしまうけど、元々は中年真っ盛りのおっさんなのだ。さすがに本家

の子どもの「子どもらしさ」には勝てない。いや勝つつもりなんてまったくないけど。

そういえば僕の初恋は前の世界で小学校の丁度この時期だった。同じ習い事をしていた愛ちゃんという子が気になって仕方が無くてよく一緒に遊んだり、ドキドキしながら家に遊びに行ったりした。

けど結局告白することなく、僕は違う中学に行ってしまったんだ。  
愛ちゃんは今ごろ何しているんだろう。

「おい、何だよワカイって？」

思わず言葉に出してしまっただけ、トニル達は不思議そうな顔をこっちに向けた。確かに子どもに「若い」って言っても意味が分からないだろう。

「い、いやなんでもないよ。それにリアとは幼馴染で親が仲良しっただけで別に好きでもなんでもないし、ただ一緒に帰ったり、一緒に勉強してるだけだよ！」

「お前！　一緒に勉強までしてるのか！」

ヤバイ、どうやら言葉を間違っただけらしい。一気に緊張が走る。

「もう我慢できない、キロ！　覚悟しろ！」

そういつてトニルは手の平をこちらに向けた。そこは是非とも我慢してほしかったがしょうがない。僕は防御の姿勢をとって身構える。

ファイレーラ

トニルは中級の炎魔法を唱えた。でかい火の球が手に出現し、放たれる。とにかくこの攻撃をくらって早くこの状況を終わらせよう。そう思った僕は少しでも防御の姿勢を緩めた。

バンッ！

突然ものすごい衝撃が体を襲い、僕は文字通り吹き飛ばされた。

### 第13話「反抗心と癒しの魔法（4）」（後書き）

だんだんキャラが増えてきて作者も分からなくなってきました  
とりあえず登場人物表でも書こうかと思うのですが、いりますか？  
必要なら掲載したいと思います。

## 第14話「反抗心と癒しの魔法（5）」

B A A A A A N ! ! ! !

アメコミ風な効果音だとこんな感じかもしれない。  
それだけのすごい衝撃だった。

辺り一面を煙が立ちこめ、かなりの音に耳がキンキン唸る。焦げ臭い匂いに充満した場内はガス爆発でも起きたかのように地面に黒い爆発痕を残していた。

これは後から確認した光景であり、そのときの僕はそんなことを考える間もなく吹き飛ばされ、転げ周り、体中をしこたま打ちつけた。

爆発。

その一言につきるといった衝撃に僕だけではなく、トンネル、シャリッチ、あとチビも吹き飛んでいた。3人は僕よりも至近距離で爆発を受けたようで、服は焦げ、吹き飛んだ位置も僕よりわずかばかり遠い。何より一番体重が思いトンネルがこれだけ吹っ飛んでいるのだからこの爆発の酷さが分かるといったものだ。

これも後から確認した光景である。

「くっ……」

しばらく爆発によるダメージと突然のことで混乱したことにより

何もできずにいたが、ようやく整理がつき起き上がる。体が悲鳴をあげるように痛みが僕を襲い、こらえきれずにちよつとだけ涙が出た。

辺りを見回し状況を確認。そして3人を見つけた後、また襲ってくるかもしれない衝撃に身構えた。

もちろんトニルの魔法でこんな衝撃が起きたわけではない。

トニルの放った中級炎魔法ではせいぜいガードを緩めた僕の皮膚を少量焦がす程度で、それも水に浸せばすぐに直る。この爆発は明らかに上級の爆発魔法であり、威力はそれほどないものの、魔力をさらに込めていれば重傷者がでていたかもしれない。トニルではこんなことはできない。

「キローだいじょうぶー？」

犯人は意外にも普通に現れた。  
というかりアだった。

「結構すごい爆発だったね。大丈夫だった？」

なんとこの娘は自分が魔法を放ったにも関わらず平然と僕の前に現れ、普通に僕の状態を気にしたのだ。意味が分からないだろ？  
僕も意味が分からない。

「あつ、傷！ 血が出てる！ 医療室にいかないと！」

尚も僕の傷を見つけ、あわてるリア。

「えっと……いろいろ聞きたいことは沢山あるんだけど……まずどうやって入ってきたの？」

カギは確かしまつてたはずである。まさかぶち壊したのか？

「変なこと考えてるでしょ？ 昼休みにこの3人とキロが話してるの聞いたから先に訓練場に入って待ってたの」

普通に普通の答えだ。

「キロを助けるために待ってたんだからね！ 感謝してね！」

誇らしげに胸を張るリア。

「えっ、いや僕も巻き込んでるじゃん。……ていうか明らかに僕ごと狙ったよね？」

実はリアは魔法の成績がとても良い。クラスで2、3番には入るだろう。だからもし僕を助けたのだとしたら、僕まで巻き込むということはしないはず。

「そのことなんだけどお……」

リアが接近する。

目と鼻の先。あれ？何か怒ってるのかな？

「キロ……私さっき、キロが変なこと言ってた気がするんだけど……」

…あれ、嘘だよね？」

目が近づく。まるで僕の心の奥底まで見つめているみたいだ。怖すぎる。

考えるんだキロ！ きつとここで何も言えなかったら確実に、確実に僕はリアの爆発魔法を直撃することになる。先ほどの会話で何か僕は口走ってたか？ リアを怒らせるような内容はなんだ？

「あ、あははは……冗談に決まってるじゃん。リアは僕にとって一番大事な友達だよ！」

「一番大事な」という部分を強調して言ってみた。どうだ？

「そっだよね！ 冗談だよね！ ほら、じゃあ医療室に行こうか」  
リアは満面の笑みで答えた。うん、カワイイカワイイ。

そうして僕とリアは3人を残したまま訓練場をあとにした。

第14話「反抗心と癒しの魔法（5）」（後書き）

リアはヤンデレじゃありません。

## 第15話「反抗心と癒しの魔法（6）」

この世界で人はめったなことでは怪我をしない。

元々体が丈夫なのもあるだろうが、常に魔力で体を守られているからだ。だからちょっと転んだ程度では擦り傷一つつけることはできない。もちろんだからといって痛くないかといわれればそれはまた別の話だ。

とにかくそんな世界なので僕は一度も怪我という怪我をしたことが無く、医療室の中に入るのもこれが初めてだった。

前の世界での保健室のようなものを想像していた僕としては、目の前に広がる陰湿な内装はとても驚かされるものだった。全体的に暗く、治療道具というよりは実験道具といったような薬や調合類の数々は保健室というより理科準備室と形容したら分かりやすいだろうか。

その中にリアに腕を引かれて突き進んでいく。

「スキナー先生、怪我の治療をしてもらいたいですけど！」

リアは大きな声で中にいる人物を呼ぶ、部屋の一番奥の机で何かの作業をしていた男は、リアの呼びかけに振り向くと、また作業を少ししてようやく立ち上がった。そのままこちらへ来るとまずじつとリアを見て、その次に僕を見た。なんだか気味が悪いというか、クールというか。

「どうかしたのか？」

「友達が怪我をしちゃって。魔法の訓練で暴発しちゃったみたいなんです」

あ、こいつ平然と自分がしたことを無かったことにしやがった。僕は横目でリアをチラツと見たが、口には出さないことにした。先ほど口は災いの元だと実感したばかりだ。

スキナー先生は無言で僕のほうを見て、怪我の部分を確認するため、腕をとった。吹き飛んだ時に打ったのか、右腕の肘部分は袖が破れ擦り傷が酷く、血で真っ赤に滲んでいる。隈なく見るわけもなく、他の怪我を確認すると無造作に傷口を触りだした。

いや、既に痛いからもう何されても痛いけど、直接触るのは衛生的にどうなんだろう？僕はこの奇妙な診察にただただ先生を見ただけだった。無論ちよつと目には涙が浮かんだけど（子どもってすぐ涙出そうになるから困る）。

「ずいぶん派手に転んだようだな。右肘は治療したほうがよさそうだ」

そう良いながら右の袖を無遠慮に捲り上げる。

どうでも良いがその態度や話し方は治療を行なうものとしてどうなのだろう。長くばさばさの髪もそうだけど、全体的に清涼感が感じられない。これでは患者と良い信頼関係を結ぶことができないだろう。むしろ治療する気の無さが目立っている。

めんどくさそうな表情全開だ。

早く消毒するなり何なりしてくれと思っていた僕だったが、もっと早く治療は終わった。

スキナー先生は傷口に手を当てるとそつと呟いた。

メンテ

そして布で傷口についていた血を拭くと、傷はなくなっていた。傷口は塞がっていたのである。あまりに一瞬だったのでどういう風に怪我が治ったのか見ることもできなかった（どっちみちスキナー先生の手が邪魔で見えないのだが）。

「はい、終わり」

そう言つと、彼はもう仕事は終わったとでもいうように二人を見ることもせず、また部屋の奥へと戻っていった。「じゃあ帰ろつか」とリアに引つ張られ、僕たちは岐路に着いた。

そりゃそうだ。

魔法がある世界なんだもん。治療魔法、回復魔法だってあるに決まってるじゃないか。

リアと適当に話をしつつ、今日あった出来事とその結末をぼんやりと考える僕だった。

## 第15話「反抗心と癒しの魔法（6）」（後書き）

回復魔法の呪文がホイミしか思い浮かなくてどうしようかと思いましたが。

ちなみに呪文にはある法則があります。たぶん分かりやすいです。ちなみにちなみに人物の名称にも法則があります。そのときに私の近くにあった本やCD、ゲームからです。

でも重要な名前をつけてる人もいたりします。今回のスキナーさんがそうです。だからといって彼が重要キャラかといわれたらそれはまた別の話なのですが。

## 第16話「反抗心と癒しの魔法（7）」

「治療魔法を教えてください」

「嫌です」

治療魔法があると知った僕は早速治療魔法を習うことにした。

これなら攻撃魔法と違って便利だし、相手を傷つけることなく、他の人の怪我を治すことができる。一石二鳥どころか気分的には五鳥くらいだ。意気揚々と家に帰って教科書を開いたのだが治療魔法のことはどこにも載っていない。どうやら子どもではまだ習わないようだ。

それならばとクラス担任のリシュナ先生に聞いてみたところ、治療魔法はイメージが難しく、とても高度な魔法で学校では教わらないし、軍でも使える人間はそういないのだとか。

「興味があるのならスキナー先生に聞いてみたら？」

僕が魔法に興味を持ってくれたことが嬉しいのか先生は治療魔法の勉強を勧めた。率直に聞いてみたら「好きでもないことを無理にやらせるよりかは良いでしょう」とのこと。やっぱり迷惑をかけているのだと正直後悔した。でもリシュナ先生はスキナー先生へ仲介してはくれないようだ。

「あの人なんとなく苦手なのよね」

こんなに素晴らしい先生でも苦手な人がいるのだから、やっぱり人の心理は奥が深い。もしくはリシュナ先生でさえ苦手にならざるを得ないほどスキナー先生が異常なのか。

「治療魔法を教えてください」

「嫌です」

決して冒頭に戻ったわけではない。

同じ言葉を二度繰り返したのだ。つまり同じ会話を二度繰り返したわけで、二回同じように拒否されたわけだ。

理科準備室のような医療室。その奥で一心にレポートが何かを書いているスキナー先生の後ろから言葉をかけたところ、拒否された。仕方なくもう一度言ってみたのだが、こちらを見ることも無く同じ言葉を呟ただけだった。

とりあえず聞き間違いではないことは確認できた。

スキナー先生は研究者としてのパーソナリティーの一面が強いのだろう。僕だって前世では研究職についていたからよく分かる。できるだけ自分の研究の邪魔になることは避けたいのだ。前の世界での僕もできるなら授業など一切行わず、自分の研究を進めたいと何度か思ったことがある。だからといって授業を疎かにしたことは無い……はずだ。

この人。

スキナー先生に何度治療魔法についての教えを請うたところで、

彼は教えてはくれないだろう。最初と最後、最初で最後の2回の頼みは明確な拒絶という形で、これから何度、どのような形で頼まれても断るということだけをはっきりとさせていたような気がする。

彼にとって怪我をした人の治療だけがこの学校で自分が責任を持つて行なうべきことであり、それ以外のことは自分の関与の外。優先、非優先の存在すらも無いまでに、治療以外では自分の研究を行なう。選択の余地すらない選択肢だ。

以上、彼についての考察をした。

結論としては、「彼から治療魔法を教わるのはあきらめるべきだ」ということが分かった。そしてそれは「治療魔法を勉強するのは今は難しい」という結論にへ直結する。

しかし、残念ながら僕も前の世界では研究者であった。それ故、知識への探求者である以上、自分の研究（ここでは勉強したいことだ）をあきらめるといふ考えをもつことは無い。

世界には絶対的な不可能というものは存在せず、あるのは違う可能性への糸口だけだ。

要するに「スキナー先生から教わる形で医療魔法を学ぶ」のは無理なら「スキナー先生から教わらない方法で医療魔法を学ぶ」ことを可能にすればいいということだ。

絶対に医療魔法を学んでやる。  
どうやって学んでやるのか。

## 第16話「反抗心と癒しの魔法（7）」（後書き）

ようやく主人公が魔法に興味を持ったのに、思わぬ形でつまずきます。

しかし主人公はあきらめません、あきらめることなんてありません。

よろしければ感想や評価をお願いします。

分からないところがあれば何でも聞いてください。作者が分かっていたら答えることができますと思います。

## 第17話「反抗心と癒しの魔法（8）」（前書き）

この話では一部暴力的なシーン？があります。

血とか傷とかが苦手な人は読まないほうが良いかもしれません。

## 第17話「反抗心と癒しの魔法（8）」

刃を腕にあてて思いっきりひく。

当然のように鋭い痛みが刻み付けられ、一筋の線に赤い液体があふれ出してくる。これでは足りないのと同じ箇所を何度も何度も傷つける。最初は一筋だった切り傷が2重になり3重になり、やがて皮膚がずたずたになり血はおびただしく流れ、肉はえぐれる。

都合4度目の傷。最初の3回よりも今回はスムーズに傷をつけることに成功した。自傷という行為事態は以前は何度か見た事のある光景であったが、自分がやってみると案外上手く傷付けることができない。深く傷つけられないという心理が働いてしまい、何度もためらい傷を付けてしまう。

自傷行為をできる人を僕はすごいと思う。世間では自傷行為（主にリスカーという）をメンタルの弱い人間がやることだと笑ったり、蔑んだりする人がいると思うが、一度刃物を自分の手にあててみるといい。どんなに自傷をすることが難しく、すごいことか分かると思う。そんなにすごいことをするのだから自傷行為をせざるをえなかった状況はともすすごいものなのだろう。（それに個人的にはストレスや不安を体外に吐き出してしまふ人よりは断然マシだと思う）何事にもその心理的背景、さらには環境状況を調べることは重要なことだ。それをしないでただ笑ったり、軽蔑や攻撃しかできない人は更なる成長を望むことはできない。ちよつと違うが「精神的向上心のない者はバカ」だ。

あ、でも自傷行為をする人はもつと良い解消方法があるはずだか

ら探してみてください。ピアスとかならすすきりできるし、カッコいいと思うよ。それもダメなら近くの心理クリニックに行ってみるのもオススメです。

話を戻して何で僕がこんなことをしているのかというと、もちろん医療魔法を勉強するためだ。少々荒っぽい方法だが、手っ取り早く勉強するためだ致し方ない。

「スキナー先生、怪我をしたので治療してください」  
「……また君か」

スキナー先生はその表情に少しだけ呆れたような感情をのせて言う。

一番の勉強方法は検証と実験だと考えた僕は早速スキナー先生が実際に治療魔法を行なう様子を見て治療方法について学んだ。もちろん誰かを傷つけることはできないので、自分を傷つけることにした。

スキナー先生は2回目くらいで僕の意図に気づいたようだが、彼の仕事に対する性格上、仕事以外はしないがやるべき仕事は必ずする。気づいていても彼は治療してくれるはずで、それは正解だった。

メンテ

いつものように傷口に手をあてて軽く呪文を唱える。それだけで手を離れた瞬間にもう傷は治っているのだから驚きだ。どんな仕掛けでこの魔法ができているのだろうか？

というか正直僕が医療魔法をできるのだろうか？

できなかったら未だにズキズキする痛みは無駄になってしまっただが。

## 第17話「反抗心と癒しの魔法（8）」（後書き）

なんだかいろいろツッコまれそうな行動をとってる主人公です。  
どんどんツッコミを入れてやってください。

## 第18話「反抗心と癒しの魔法（9）」（前書き）

この話では一部暴力的なシーン？があります。

血とか傷とかが苦手な人は読まないほうが良いかもしれません。

## 第18話「反抗心と癒しの魔法（9）」

次はいよいよ実験だ。

スキナー先生が行なった医療魔法を検証してみると、結論としては一種の絆創膏のようなものではないかと考える。

最初は傷を回復状態までさかのぼる時間操作魔法や傷口を活性化させて修復する魔法、空間魔法による傷の変換等を考えていた。しかし、それらの魔法を使うには手をあてて呪文を唱えるというたった10秒や20秒の動作では短い気がする。その上時間操作魔法などがあるならば、それは明らかに上級以上の魔法であるだろう、そんな魔法を医療のために使うとは思えない。

また傷口からでた血はそのままなことから治療魔法は全てを元に戻すことのできるわけではないことが分かる。思うに治療魔法とは傷を治すための応急処置に近い魔法のようだ。だから最初に考えていた回復魔法とは違って何でも回復できるわけではないらしい。傷は治るが体力を回復することはできないようだ。

次にスキナー先生の動作の意味を考える。

まず、傷口を触ることだ。

これは衛生的にあまりよくないことだが、おそらく傷の具合、どのような傷を負っているかを正確に知るためであろう。傷口がどこまで延びているのか、また切り傷や擦り傷、打撲によって傷の形は異なる。それを調べるための、いわば触診の一種だろう。痛いけど、そして傷口に手をあてて呪文を唱える。

魔法を受けた感覚からすると、何か魔力の膜のようなもので一瞬傷口を覆われて、気づいたら傷口はふさがっているのだ。考えるに、この魔力の膜のようなイメージでもって傷口を絆創膏のように覆い、

そして傷口の細胞同士を引っ付けてしまうのではないか。

つまり、医療魔法とは「怪我を回復させる」というより「傷口をふさぐ」という魔法で、使用するには「傷口の正確な状態を知ること」と「傷口をふさぐためのイメージ」が必要になる。のではないだろうか。

とりあえずこの仮説を基に僕は自分で自分に医療魔法を使用してみることにした。

今日2度目である自分の腕に傷を付ける行為を終え、腕にある傷口を触ってみる。

あえて自分から痛みを引き出すこの行為に最初は若干いやなものがあるが、徐々に傷口の正確な状態が指を通して伝わる。

そのまま傷口に手をあてて僕はそつと呪文を唱えた。

傷口に魔法の膜を作るようなイメージ。

そして傷口をふさぐようなイメージ。

メンテ

おそろおそろ手を離す。

流れていた血をふき取り傷口を確認すると、そこには一筋の赤い線が残っていた。しかし、傷口自体はふさがっていてもう血が出て

くることはなかった。

一応成功……でいいのかな？

どうやら僕は一応の医療魔法を憶えることに成功したようだ。

## 第18話「反抗心と癒しの魔法（9）」（後書き）

医療魔法ってどんな構造なんだろうと考えながら書きました。

分かりにくいところがあつたら教えてください。

というか当たり前のようにホイミとか出してしまってるけどいいの  
だろうか？何かに引っかかったりしませんかね？

あと少しでこの話は終わりです。

## 第19話「反抗心と癒しの魔法（10）」

「治療魔法を自分なりに使えるようになったので見てもらえませんか？」

「嫌です」

あれから何度か試し、治療魔法を使いこなせることに成功した。といってもやはりまだ少しの間痕が残ってしまうのだが。ほっておけばすぐに消えるので問題はないと思う（そのたびに何度も傷を付けないではいけなかったことのほうが問題だ）。

そしてスキナー先生に僕の治療魔法を視てもらって問題点があれば教えてもらおうと思ったのだが、案の定門前払い。魔法を見てもらうだけなら良いのではないかと思ったが、彼の仕事の範囲からはやはり外れているようだ。彼は一言だけ告げると、すぐに治療室の奥へと引っ込んでいった。研究熱心なのはいいことだがやはり治療者としてその態度はよろしくないのではと思う。

反対にリシュナ先生はとても驚いてくれたし、とても喜んでくれた。

「すごい！ 治療魔法って本当にイメージが難しくてできる人は少ないのよ」

「これでキ口君も、もう少し魔法に興味を持つってくれるなら先生も嬉しいわ」

授業が終わった後、まだ教室に残っていた先生に治療魔法を使えるようになったことを言うと、そう答えてくれ「先生の持っている文献の中に治療魔法について書かれているものがあったから今度持ってきてあげるね」と治療魔法の勉強を支援してくれるようだ。治

療魔法について書いてある文献自体が少ないようなのでこれは本当に嬉しい。

思うに僕が治療魔法のイメージをできたのは前の世界で少し医学をかじっていたからだろう。一時期医学部へ行こうかと悩んだ時期もあった。

「あ、この前ちょうどキロ君のお父さんに用事があったからついでに話しちゃった」

えっ何を？

「何ってキロ君が攻撃魔法を使いたくないって話よ。君は攻撃魔法を使わないでもいいと思ってるかもしれないけど、先生はやっぱこの先必要になってくると思うの。町の外にでるにしても凶暴な魔物と闘わなければいけないし、今はキロ君防御や避けるのは完璧だからいいけど、この先上級魔法や特上魔法、連鎖魔法なんていう複雑で術者独自の魔法が出てきたら防御だけでは対抗できなくなるわ。」

「最低限でも自分を守るくらいの攻撃魔法は身につけないといけないの、お父さんと一緒にキロ君もこれからどうするか考えてみて」

リシュナ先生の言うことは正しい。このままでは先生の言うとおり僕は自分の身を守れなくなってしまうかもしれない。町の外に出れないのは確かにダメだろう。

「考えてみます」

それだけ先生に告げて僕は挨拶をすると教室をでた。

「それなら、これから怪我しちゃったらキ口に魔法かけてもらえばいいじゃん。便利になったね！」

帰り道でリアは僕の話の話を聞くと嬉しそうに微笑んだ。ちなみにその前に「使ってみてよ」と言われたので「その前に怪我がないと使えない」といったら「じゃあ怪我してよ」といわれて全力で断った。何故自分から痛い思いをしないとイケないのか。

「人を便利な道具みたいに言うなよ。それにリアはそんな怪我することないじゃんか」

「まあね。でももし怪我したときに治療室までいくのはめんどくさいじゃん。スキナー先生迷惑そうな顔するし」

やはりリアも治療室に行くのはなんとなく嫌なのかもしれない。

「確かに治療魔法は便利だけど、それよりお前はもう少し攻撃魔法を勉強しろよ。だから攻撃くらって怪我するようなヘマをやるんだろ」

「それもそうだね！ アークの言うとおりだよキ口。もっと強くないと自分で自分の怪我を治療しないといけなくなるよ？」

「よけいな世話だって。というかそもそも怪我をしたのはリアがいきなり魔法ぶっ放してきたからだろ！」

「うわっ！ それアークの前で言わないでよ。せつかく皆に隠してるのに！」

「もしかして、訓練場めちゃくちゃにしたのお前らかよ！」

アークは呆れ、リアは赤面して言い訳をしていた。

「というかアークだって僕に傷の一つも与えたことないくせに」

「まああれは手加減してやってるからな。さすがに俺も攻撃しない奴に本気で攻撃はできないさ」

「なんだとー！　じゃあ本気とやらを見せてもらおうじゃないか」  
「ふん、攻撃しない奴にどれだけですごまれても怖くないな」  
「キロもアークもやめなさいよ！　今度訓練のときに戦えばいいでしょ」

そんな話をしながら僕らはそれぞれの家へと足を運んだ。  
そして家でお父さんから急な提案を受けたのだった。

## 第19話「反抗心と癒しの魔法（10）」（後書き）

アークって誰？って思った方、新キャラです。

## 小話「小さな国のひとつの家族（１）」（前書き）

主人公のお母さん、ルシア視点のサイドストーリーです。

## 小説「小さな国のひとつの家族（１）」

朝

太陽の目覚めとともに暖かな空気が流れてくる。

フライパンを暖めてくれる炎も心なしかいつもよりいつそう暖かな光を出してくれているような気がして、いつも作っているメニューだっていつもより美味しく感じられるのではないか。

「いつてもうちの人はどんな料理を作っても「おいしい」って言うってくれるんだけどね。」

ルシアは料理の味見をしながら苦笑する。

今日の朝食はパンと目玉焼き、トマトとなすとひき肉のチーズ炒め。

我が家で定番のメニューは今日も納得の出来だ。

フロントル家では、各自が各々のペースで起きるので、誰かが誰かを起こすということはよほどのことが無い限りしない。だから起きてくる順番も大体いつも同じだ。

まずルシアが一番早く起き、朝食の準備を始める。朝は基本的に簡単なもので済ますため、準備は比較的早く終わる。だいたい準備が終わった頃に夫であるカルロが起きてきてくれるのだから私たちの相性はやはり良いのだろう。

「おはようあなた、今日はすぐに出るの？」

「ああ、これから遠征の準備があるからな。おっと、おはようルシア」

毎日変わらない朝の挨拶を終えるとカルロは自分の席へ、ルシアはその隣に腰をかける。毎日というわけではないが極力家族全員一

緒に朝食を食べる。ただしまだ息子達は起きないので、今はつかの間の2人きりの時間というわけだ。

ルシアは自分の分とカルロの分のお茶を用意し、片方をカルロに渡す。

カルロはライプチ国の軍人だ。今は王国第3軍の副指令、5番隊の隊長という職に就いている。第3軍は主に国内での犯罪などの取り締まりや魔物被害の取調べなどを行なうところだ。内政面での警備なども担当することもある。

カルロとルシアは幼い頃からの幼馴染だ。ルシアの感覚としてはそのまま一緒にいたらいつの間にか結婚して家族になっていたというくらい、昔から何をするにしても一緒だったのだ。

「明日には出るの？」

「いや、いろいろと時間がかかるからな、おそらく3日もしくは4日後くらいかな。なに、遠征自体はたいしたものではないから1週間ほどで帰ってこれるだろう」

カルロが所属する5番隊で今度、遠方での任務があるので今日はこれからそのための準備を行なう。

「そっか、じゃあしばらく子ども達が寂しがるわね」

もちろん私だって寂しいのだけど、ルシアは少し寂しそうに笑ってみせる。

「その間子ども達は君に任せるよ。あと向こうにいる間は毎日君に連絡をするよ」

こうしてさりげなく私のことを気にしてくれるのがカルロのいいところだ。私達もまだまだなとルシアは心の中で微笑むのだった。

「お母さん、おはよう」



## 小話「小さな国のひとつの家族（１）」（後書き）

お母さん視点のサイドストーリーのような話です。

あまり本編のストーリーとは絡まないかもしれませんが、ただまだ兄達が会話にあまり出てないのでそろそろ書いてあげたいなという思いから書きました。

本当は一気に書き上げるつもりでしたが、やはり１０００文字程度で区切ることにしました。

## 小話「小さな国のひとつの家族（２）」

「お母さんおはよう」

二人しばらく話していると、子ども達が目覚めたようだ。

フロントル家はライブチ城から少し離れたところにある二階建てのきわめて平凡な建物で、子ども達３人は二階に１部屋ずつ、私達夫婦は一階の１部屋を寝室にしている。

本来、カル口の役職なら、王宮の近くに住むことを許され、召使いを雇うこともできる。また望めば貴族の地位に就くこともできる。しかし元々平民出身のルシアとカル口は貴族になる気になれず、また召使いを雇う必要があるほど家事に困っていないことから、召使いも雇っていない。

上からドタバタと音がすれば子ども達が起きている合図になる。

「おはよう、ロニ」

いつもどおり、一番最初に来るのは次男のロニだ。

ロニはいつもの席、カル口の隣へと座ると落ち着き無く、机の上に並ぶ料理を見つめる。朝起きたばかりなのに、食欲はすでに彼を支配しているらしい。私はカル口の対面に座りなおすと、ロニの皿に料理をよそった。

ロニは今年で１５才になる。来年には学校を卒業するというのに、まだまだ子どものままだ。とにかく明るく、とにかく元気で、とにかく負けん気が強い。

「まだ食べちゃダメ！ もう二人も来るわ」

ルシアが注意すると「はい」としぶしぶ出した手を引っ込める。反抗期真っ只中なのか、なかなか私に自分の気持ちを見せてくれる

ことはない。だけどそれでいい、ロニが笑顔でいることさえ分かっている。それだけで充分だとルシアは思う。カルロもそう思っているのだろう。

「父さん、今度遠征行くんでしょう？町の外にも行く？」

「ああ行くぞ。隣町のリファレンまで行って、そこで3日ほど滞在して仕事をするんだ」

ライブチ国は5つの地域から成り立っている。

王都であるライブチ

北にある町シーレン

南にある町ケールー

西にある町ルリエニス

そして東にある町リファレン

それぞれが地図で見れば隣にあるが、実際に行くとなると早くても半日、ゆっくり行けば丸二日はかかるかもしれない。もちろん道中には魔物が多く生息しており、それ故、魔物に襲われればその分時間をくうことになる。

「俺も行っちゃダメかな？」

「そうだな、行ってもいいが死んでも知らんぞ」

「大丈夫だって！ スライムなんか俺ひとりだって退治できるし」

「ロニは学校あるでしょ、私が許しません」

また勝手に町の外に出ているのかとルシアは小言を言うと「友達と遊んでるだけだよ」と悪びれることなく言う始末。

男の子なんだからしょうがないのよねとルシアはため息をつくだけにした。

ロニーが起きた後すぐにニッカも起きてこの部屋に入ってくる。

## 小話「小さな国のひとつの家族（２）」（後書き）

あれ、意外に長くなるかもしれない。

ついでに今まで説明できなかったことを書いてみようと思うとどんどん書かなければいけなかったことが増えてきて、今まで説明をど  
んだけサボってたかが浮き彫りになってしまいうつです。

よろしかったら感想と評価をお願いします。

あとお気に入り登録してくださってる方、ありがとうございます。  
何気が増えていくたびに「ウヒヒヒ」と書く気力が上がっていくの  
で現金な人間だと反省したいのですがやっぱり「ウヒヒヒ」となっ  
てしまいます。

### 小話「小さな国のひとつの家族（3）」

ニツカは17歳。

学校を卒業して、今は父と同じく軍人として王宮で働いている。平民なので親のつながりは無く、自ら志望して自力で軍人となることになった。なので配属先もカルロとは違うところだ。

「おはよう父さん、おはよう母さん」

ニツカは静かにルシアの隣へ座る。この辺りの落ち着きはさすがお兄さんといったところか。もともと大人しい性格ではあったが、家で家族と接するときにはわがままな面も見せていた。それが学校を卒業してからはそういった面はかなり引っ込んでしまった。私から見てもいい男に育ったと思う。

「……モイ入ってるじゃん」

しかし未だに好き嫌いが激しいのはいかなものかと思う。食べ物の好き嫌いをするのは根本的にわがままな性格の現れなのではないかと思う。実際兄弟で一番わがままなのはニツカだった。

「いつもいつてるでしょ、嫌いなものもしっかり食べれるようになりなさいって」

「でもどうしても好きになれないんだよ、このネバナバした感じがモイというのは地中に生える大きな茶色の塊のような野菜だ。どくどくな粘り気があり、サラダなどに入れると美味しく食べれる。

この国での一般的な野菜の一つといえるだろう。

「もう、栄養があるんだから食べなさい。体にもいいのよ？」

「母さんのいうとおりだ。だいたい軍人が食事で好き嫌いをしてどうする？ 戦場ではいつも好きな食べ物があるわけではないんだぞ」

「……父さんのいうことは分かってるよ」

ニツカは嫌いなものでも食べるかの用に嫌そうな顔で答える。

最近ニツカは父と仲が悪い。別段何かが起きたというわけではないのだろうが、いまいち話に刺々しさが残ってしまふ。おそらく軍人として何年も働いているカル口と自分を比べてしまつて、あるいは他人から比べられて嫌になつてゐるのだろう。こういったことは自分で納得するしかなく、私達はその様子を見守るしかない。

自然カル口と目が合い、お互い苦笑してしまふ。

しばらくしてキロが起きてくる。

「お父さん、お母さんおはよう」

キロはニツカの隣に座ると朝食はようやくスタートする。ようやくといつてもそこまで時間がたっているわけではないのだが。

口の前で右手を握り、朝の祈りを行なう。各自が各々の皿を持ち、食事を始める。ロニは急いでパンを口に運び、ニツカとカル口は順々に皿を空にしていく。キロはゆっくりとマイペースにパンを口に運ぶと時々思い出したかのように他の食べ物に手をつける。

キロを一言で表わすとしたら、おもしろい子どもだ。  
とルシアは思ふ。

## 小話「小さな国のひとつの家族（４）」

フロントル家の三男。

キロ・フロントルは今年で１２歳になる。ルノー魔法学校に今年で６年通っていて、成績はまずまずの位置だろう。友達も何人かいてクラスでもあまり浮くことはなく過ごしている、いわゆる普通の男の子として充分平均的な生活を送っている。

性格もまじめで優しく、時々泣き虫な面もあるが思ったことにはまっすぐ突き進む。いい子に育っている。

ルシアがおもしろいと思うのはそうだったところだ。

生まれてから学校に入るまではなんとなく「子どもらしくない」という印象があった。

まじめなキロは本当に人に迷惑をかけることがない。

兄であるニツカやロニは子どももの頃はなんだかんだと問題を起こしたり泣いたり、ケンカをして傷ついたり、ルシアを悩ませることが何度と無くあった。

しかしキロはそうだったことが一切なかった。ケンカをすることはあっても深刻な問題にまで発展することは無く、いたずらなんてまったくしない。ケガをして帰ってくることもなんて一切ない。母であるルシアもめったにキロに怒ることがなかった。もしかしたら一回も無いのかもしれない。

そこにはまじめや優しいというよりどこか大人びたものを感じてしまう。

キ口は大体において正しい。人間関係において間違った行動をすることがまったく無いのだ。自分が間違ってると思えばすぐに謝るし、自分が間違ってる無くてもその場をよくするために謝るといった感じで、素直というよりはやはり大人臭い。

だが非常に子どもっぽいところもある。

特に自分が興味をもったことに関しては異常なほどの好奇心をもって突き進むのだ。

幼い頃から魔法に興味を持ち、いろいろと使いこなせるようになったのも、その好奇心からくるものだろう。もともと最近魔法への興味はなくなってきているようだが。

そしてわけの分からない部分もある。

キ口は基本的に秘密ことをしないのだ。この年頃ならひとつやふたつくらい持っていていいような秘密、話したくないことをキ口はなんでもないことのように自分の周りで起きたこと全てを話してくれる。

友達のリアちゃんがいつもキ口の世話をやいてくること。戦闘訓練が嫌で先生に怒られたこと。アーク君がまた女の子に告白されたことなど、その日にあったことは何でも話してくれる。最もカル口には話す時間が無くてそれほど話していかないのかもしれないが、とにかくキ口は自分のことで秘密にすることは無いのかというくらい何でも話してくれるのだ。といってもまったく秘密が無いということとは無いだろう。もしかしたらとても重大な秘密を隠し持っているのかもしれない。

とにかくキ口は不思議な子どもだ。そしておもしろい子どもだ。時々わけわからないけど、まじめで優しく、本当に人が大好きな子どもだと思う。できればこのまま腐ることなくおもしろいままで育ってほしいとルシアは思う。

もちろんキロだけでなく、ロニやニツカも同じだ。3人ともタイプは違うがみんないい子達ばかりで母としては嬉しいものだ。

作った朝食を美味しそうに食べてくれる3人を見て、こういうが幸せなんだろうなとルシアはしみじみと思うのだった。

あ、4人か。

朝食を終えると4人はそれぞれ準備をして、各自、職場や学校へと足を運ぶ。キロが学校に入るまではその後の時間をキロとゆっくり過ごすが、それももう無くなってしまい少し寂しい。

最後に家を出るキロに「いつてらっしゃい」と笑顔で声をかけて扉をしめる。

夕食の献立を考えながら洗濯や部屋のちょっとした掃除を行なうと、午前中にしなければいけないことは全て終了だ。

ソファーに座り、ふっとひと息ついてルシアは苦笑する。

終わったと思ったがよくよく考えれば一日はまだ始まったばかりなのだ。

## 小話「小さな国のひとつの家族（4）」（後書き）

これにて小話は終了です。

一応お母さん視点から、主人公のことを少しでも掘り下げることができたのではないかと思います。  
次回からは新シリーズです。

## 第20話「冷酷な戦士の中の微笑み（1）」

それは晩ご飯を皆で食べている時だった。

「キロ、先生から聞いたぞ」

皆がご飯を食べひと息ついた時、突然お父さんが僕に話しかけた。その一言でお父さんが何を話そうとしているのかは充分にわかったが、僕のほうからは何も答えることができない。

「『キロ君が訓練で逃げてばかりだからどうすればいいのか分からない』ってリシュナ先生が困ってたぞ。どうして真面目に魔法訓練の授業を受けないんだ？」

お父さんが続ける。どうやらリシュナ先生はあまりちゃんと話したわけではないようだ。めんどくさがったのかな？　こんなところをめんどくさがらなくてもいいのに。

「キロは弱虫だから攻撃なんてできるわけ無いじゃん」

話を聞いてたのかロニ兄ちゃんが口を挟む。ロニは学校で僕の噂を聞くのかもしれない。

「しかもこの前それでケンカになってリアに助けってもらったんだろ？」

「ロニいい！　なんでそれしってるの？」

「うん？　リアがこの前話してくれたんだ。『キロには世話が焼けるわ』って、尽くされてるねー」

ロニは意地悪な笑顔で言った。ってか人には言うなって言っといて自分はしっかり話してるじゃん！　しかも一番知られたくない人に！

「べ、別に助けてもらったわけじゃないよ！」

リアはいきなり僕ごと皆をぶっ飛ばしたただけだ。

「でもケンカになったのも逃げ回ってばっかなのも事実だろ？」

「それは……そうだけど……」

「女の子に守ってもらうなんてだっせーな!」

そういつてロニは僕のさらにある果物を勝手に取って口に放り込んだ。もちろんやってからお母さんに「行儀が悪い」と叱られる。

ロニとは別に仲が悪いわけではない。ただロニは僕を苛めるのが好きなのだ。悪意が無いから僕としても別に嫌な気分になることはない。

「ロニ分かったから口を挟まないでくれ。それでキロはどうして逃げてばっかいるんだ?」

お父さんが再び質問に戻る。

僕は上手く伝えることができない気がしたがとにかく正直な気持ちを話すことにした。

「だって、攻撃魔法なんて使いたくないんだ」

「だからってそれだと相手に良いように攻撃されてしまうだろ?」

「大丈夫だよ! 僕防御魔法は得意だから相手の攻撃魔法を受けることなんてないよ!」

僕が今まで訓練でケガひとつ受けたことないのは防御魔法があるからだ。魔法訓練が始まってすぐに、

(攻撃したくないけどこのままじゃ攻撃を受け放題だ!)

と気づいてしまった僕は、防御魔法を必死に勉強したのだ。こっちが鉄壁の防御をしていれば相手を傷つけることなく、訓練を終わることができるからね。

だが、さらにお父さんは疑問を投げかけた。

「最近は何ガをしてるんじゃないのか? 治療魔法を受けた痕をよく見るぞ?」

ううー

それは……違うんだけど……答え辛い質問だ……

## 第20話「冷酷な戦士の中の微笑み（1）」（後書き）

新シリーズスタートです。

タイトルからは何のことだかまだ分からないと思いますがそのうち明らかになると思います。

新キャラです（アーク君ではないです）

結構、かなり長いと思います。

白熱するような展開になればと思います。

## 第21話「冷酷な戦士の中の微笑み（2）」

治療魔法の痕があるのは自分で治療魔法を練習したからだ。そしてそのために自分で自分に傷をつけたことも意味する。

さすがに自傷行為を吐露しちゃったら怒られちゃうかな。でも何も言わなかったら不思議に思われるだろうし、下手に隠すのもどうかと思う。研究者としては当然のことをしたと僕は思ってる。

「そんなに嫌なら学校なんて辞めちまえよ」

どういう弁明をしようかと悩んでいると、今まで黙って料理を口に運んでいたニツカ兄ちゃんが強い口調で僕に言った。

「お、おいっ！ ニツカそれは言いすぎだろ」

「何言っているんだロニ、魔法を勉強したくないなら学校に行く必要なんて無いんだ。街で働くほうがよっぽどマシだろ」

「だからって何も学校を辞めるなんて結論はおかしいだろ」

「うちだって何もできない奴を学校に行かせるほど十二分な余裕があるわけじゃない。父さんだって僕だってそのために軍人をやっているわけじゃないからな」

「……おいおい、兄貴だからって今の言葉は許さねーぞ！」

やばい、僕のこととニツカとロニが言い争っている。この二人はいつもは仲が良いのにたまに意見が違うとものすごく不機嫌になって、その間大規模なケンカが起きてしまう。何とかこの場を収めないと。

実はニツカ兄ちゃんと僕は仲があまりよろしくない。

元々年齢が５歳離れていてあまり接点がないということもあり幼いころはそれほど話したことがないということが僕とニツカの心理的な距離を遠ざけているのかもしれない。またニツカが青年期真っ盛りでかなり自分の気持ちを隠しているのか、僕はニツカ兄ちゃんが何を考えているのか分からないことが多い。

「こら、二人とも少し落ち着きなさい」

見かねたお父さんが二人を制止する。

「それとニツカ、今の発言は良くない。キロに謝りなさい」

「ふんっ！ 言ってることは正しいだろ！ 謝る必要なんかないね」

「ニツカ！」

お父さんにそれだけ言うのとニツカは席を立ち、二階へと上がっていった。

しばらくの沈黙。

「……しょうがないな。父さんが悪かった、もう少し軽い気持ちで聞くつもりだったのに少し重くなってしまったな。しかたない、キロ。食事が終わったら少し二人で話をしよう」

お父さんの一言で夕食でこの話は終了となった。

一階にあるお父さんの書斎。

そこでお父さんと話をすることになった。

「キロ、お父さんは別にお前を責めているわけじゃない。ただお前が魔法の勉強が嫌いなら学校を辞めてもいいし、学校にいたいというならいてもいい。キロ自身はどう思っているのか、それをお父さんに聞かせてくれないかい？」

## 第21話「冷酷な戦士の中の微笑み（2）」（後書き）

ニツカが悪ものみたいになってて可哀想です。

良いお父さんってどういう感じなんだろうと考えながら書いてます。

## 第21話「冷酷な戦士の中の微笑み（3）」

僕は考えた。

自分が何をしたいのかを、何が嫌なのかを。

「別に魔法の勉強が嫌いってわけじゃないんだよ。学校だって楽しいし、治療魔法だってできるようになったんだよ！　治療魔法の痕があるのはそのせいだよ。……ただ攻撃魔法を習うのは……なんだか嫌なんだ。誰かを攻撃なんかしたくないし、誰も傷つけないで」

正直な気持ちを話すのは難しい。

それは普段から人間は自分の気持ちを出すことに慣れていないからだ。また大半の人間にとって自分の本当の気持ちというの自分でも分からないものだ。それは僕にとっても同じで、だから上手く言葉にすることができない。

本当の気持ちを自由に言葉にできれば物事は今よりスムーズになるのに。

「そうか、しかし先ほども言ったがそれだと相手にいいように攻撃されてしまうだろう？　今はそれでも防御魔法で防いでいるかもしれないな

いけど、この先防御魔法でも防げない魔法だつてでてくる。自分の身を守るためにも攻撃は必要なんだぞ？ 攻撃は最大の防御っていうだろ？」

お父さんは正しい。

100人が100人攻撃をしないなんて間違っていると思うかもしれない、いや思うだろう。

それは僕だつて考えている。

それでも

「誰かを攻撃するなんて僕にはできないよ」

なんでか分からないこの気持ちだけど、これを変えることはできない気がする。おそらく前の世界で形勢されてしまった考え方なのだろう。

人を傷つけるなんてできない。例えばそれで自分が傷つくことになっても僕にはそっちのほうが良い。

「そうか、キロがそう思うならお父さんはそれでも良いと思ってるよ」

お父さんはそう言うと言つた。

お父さんの目は優しい。鋭く深い、睨みつけられたらとても怖そうなのだけど、僕を見るときのお父さんの目はいつも笑っていて、蒼い目の奥も心なしか光つてるように感じる。

そしてお父さんは低く心地良い声で話を続けた。

「しかしそれだと街の外にいる魔物が襲ってきたらどうする？ 奴らは訓練とは違ってキロ達を『殺し』にかかってくる。それでも魔

物にも攻撃はできないかい？」

「そ、それは……」

わからない。

まず魔物に実際にあつたことのない僕には、魔物に実際襲われたとき自分がどういった行動をとるのかわからない。そりゃ殺されるのは絶対にいやだ。

だけど攻撃できるのだろうか。

「わからないか、じゃあ次の質問をしよう」

「もし何らかの事件でキ口の友達　例えばリアちゃんが誰かに攻撃されて傷ついたらキ口はどうする？　それでもリアちゃんを傷つけた相手を攻撃せず、その誰かを許すことはキ口にできるかな？　治療魔法は確かに便利であればありがたい魔法だが、傷つく前にその原因を失くすことができれば、悲しむ人はいないのではないか？」

もしリアが誰かに攻撃されたら僕はそのままつつ立っているだけなのだろうか。

リアは僕が誰かに攻撃されそうになったときすぐさま相手を攻撃した（誤って僕ごとぶっ飛ばしたが）っていうのに。

どうすればいいのかわからない。

答えは決まっているのに、僕の頭がそれを否定する。どうしてもそれに決めることができない。

なぜ僕は人を攻撃したくないのか？

人が傷つくのが……見たくない……のか？

ぼん

頭に手を置かれた。

「そこまで思い悩むことはないさ。お前はまだ子どもなんだから、悩む時間も考える時間も、取り戻せる時間だっていくらでもある。」  
そしてくしゃくしゃと髪を撫でるとお父さんは微笑みながらこう付け加えた。

「そこでお父さんから1つ提案があるんだが      少し冒険をしてみないか？」

## 第21話「冷酷な戦士の中の微笑み（3）」（後書き）

少しだけ主人公の心理に触れることができたのではないかと思います。

お父さんの提案とはいいたい！？

## 第22話「冷酷な戦士の中の微笑み（4）」

「キロが攻撃をくらうなんて珍しいね」

攻撃した張本人　　リアが駆け寄ってきた。

### 魔法訓練の時間

昨日のお父さんに言われたことを考えてたらリアの攻撃（中級の爆発魔法）をくらってしまった。

訓練で攻撃にあたることなんて一度も無かったのでちょっと悔しい。しかも本当に集中してなかったみたいで、攻撃があたるまで一切気づかなかった。情けない。

魔法訓練の時間は二人一組で魔法での攻防を時間いっぱいまで行なう。

学年が進めば体術の訓練もあるが、今はただ魔法を打ち合うだけだ。

時々先生から指定されたパートナーと訓練を行なうこともあるが、基本は好きに二人組みを組んでいい。前の世界では恐怖であった「二人組みを作って」だが、今はリアがいるので怖くない。というかこの世界では仲のよさというより自分の強さのレベルで二人組みを作るので仲間はずれといった心配はない。

では何でリアと二人組みを組むのかといえば、リアは強すぎてクラスの誰も相手にならないし、対する僕は自分で言うのもなんだが、防御が上手く攻撃があたらないからおもしろくないようだ。

リアは僕らの学年でもトップ5に入るほど強い。もしかしたら使いこなせる上級攻撃魔法の数はトップかもしれない。そのリアの爆

撃とも言えるような攻撃を全部きっちり防ぐことができるんだから、僕だって結構すごいんじゃないか？

「もしかして、ついにキ口の防御を破るほど私強くなっちゃった？」  
「そんなわけ無いじゃん。ちよつとぼーつとしてただけ、問題ナシ」  
「でもその油断したところを突いたのは私の功績だからねーさあ、起きて起きて」

リアに手を差し伸べられ、その手を握ると僕は引つ張り起こされる。

「あーあ、膝ちよつと血が滲んでるよー」  
「うわ、本当だ……まあいつか」

見ると膝から少し出血していた。

あわてることなく傷の具合を確認する。少しすりむいたようなケガになっていてほつといても直ぐに治るだろうが、せっかくなので治療魔法を使おう。

傷口に手をあてて、傷を塞ぐイメージ。

メンテ

手を離すと傷跡ひとつ無い、いつもの膝に戻っていた。

「へえー本当に治療魔法できるようになったんだ。すごいねー」  
リアが珍しそうに目をキラキラさせる。ちよつとだけ嬉しいな。  
「まあちよつとしたケガだったらある程度治療はできるんだけどね……」

「ん？ だけど？ どうかしたの？」

「んーただこれって治療はできるけど痛みとかはそのままだよね」

「そりゃそーでしょ。それがどうかしたの？」

そう、治療魔法では「痛み」まで治すことはできない。

もともと応急処置に近い魔法だから無理も無いが、僕が回復魔法でイメージしていたのは、痛みも無くなり体力も全て元通りというものだったから、やっぱり違和感がある。どうにかできないかな？

「とりあえずもうすぐ訓練の時間が終わるから、先生のところに集まっておこうよ」

リアに促され僕たちは訓練を終わらせたのだった。

第22話「冷酷な戦士の中の微笑み（4）」（後書き）

あれ……お父さんの提案は……？

## 第23話「冷酷な戦士の中の微笑み(5)」

訓練が終わると午前の授業は全部終わり。昼食の時間になった。

リアと二人で違うクラスのアークを待つて。3人で学校の中庭にあるイスに腰を下ろし、各々弁当を食べる。僕もアークも別にどこで食べたってかまわないのだが、リアがどうしてもここがいいというので、雨の日以外はだいたいここで食べることが多い。

「で、今日は何をそんなに考えてるの？」

リアが僕の顔を覗き込む。いつも思いつけどリアはなんでこんなにも鋭いんだろう。

「そりゃー私の攻撃をまともにくらっちゃうくらいボーっとつ立つてるんだもん。何か考え事してるのまる分かりだよ」

あれ、もしかして考え事してるの分かってて攻撃したのか？……あまり深く考えないでおこう。

「ちっ、もし俺がその場にいたらもっと痛めつけてやれたのにな」

アークがこれでもかというくらいニヤニヤしながら、毒を吐く。

こいつは性格のほとんどが嫌な奴なのでこれくらいは呼吸をするように言ってくる。

「うるせーよ、アークの攻撃なら注意しなくても簡単に避けることができるね」

「ははっじゃあ今度訓練するときには俺の本気を見せてやろうか？」

「お前の本気とやらはいつたい何個あるんだよ。この前の本気も全然たいしたこと無かったじゃん」

「なんだとー！ 必死に逃げてたくせに！」

アークが緑色した鋭く開いて僕を睨みつける。怒ってるフリだとはわかってても本当に怖く感じるからアークの演技はすごい。

「はいはい、ふざけあいはいいからキロの話を聞こうよ」

リアが僕とアークのふざけあいをいつものように捌いて、最近おなじみの遊びは終了。

というかもう僕が話すことはリアの中では決定事項らしい。そう  
なると僕も決定されたことには従わないと、他に話すことも無いの  
で話すことにしよう。

もちろん、話すことは昨日のお父さんの提案だ。

「街の外にしばらく行ってみないか？」

お父さんの言う冒険とは街の外でしばらく過ごしてみることだ。  
簡単に前の世界のノリで言えばキャンプといったところだろうか。

「まあしばらくといっても学校があるから2、3日くらいだ。街の  
外に出て実際に魔物と遭遇してみてキロにとって本当に攻撃魔法が

必要ないかどうか考えてみるのもいいだろう。なあに、別に冒険と  
いっても魔物と常に戦闘をしないといけないわけじゃない。お父さ  
んと街の外で魚をとったり、山に登ったりして遊ぼうじゃないか」

確かに僕はまだ街の外に出たことがないので、実際に魔物にあっ  
てみれば何か変わるかもしれない。街の外で遊ぶのも楽しそうだ。

「それにキロとはなかなか遊ぶことが無かったからな、たまには親  
子で遊ぶのもいいだろう？」

確かにお父さんはいつも忙しそうで、あまり遊んだことはない。

第23話「冷酷な戦士の中の微笑み（5）」（後書き）

お父さんの提案は街の外にでる事でした。  
大丈夫なのか？主人公？

## 第24話「冷酷な戦士の中の微笑み（6）」

僕が学校に通う前からお父さんは仕事で忙しそうだったし、学校に通いだしてからには特に一緒に遊ぶといったことはしたことが無かったから、この提案は素直に嬉しい。僕が返事をしたときはきっと目が輝いていたに違いない。

「というわけで今度お父さんと街の外に行くことになったんだ」

食べ終えた弁当を片付けながら僕は2人に話す。

そういえばどうでもいいけどこの世界でもコーヒーに似た飲み物（というかコーヒーそのもの）がある。食後にはだいたいこれを片手にひと息いれるのがこの国での習慣だ。まえの世界にいた時からコーヒーを相棒にしていた僕としては素直に嬉しい。研究室に入る前、まだ一介のカウンセラーだった頃は特に手からカップが離れなくなるほど好んでいた。

匂いの記憶は特に鮮明に昔の情景、感情を思い出させてくれることが多い。それは匂いという刺激が、感情を司る扁桃体という部位に直接働きかけるからだとか、様々なことが言われている。このことを前の世界ではどこかの文豪の名前をとってブルースト効果といわれる。

今、弁当の代わりに手にあるカップから漏れる匂いはあの頃の感

情を思い出してくれる。

苦労と苦悩と挑戦に明け暮れる日々の感情だ。

「キロが街の外に出るなんて危ないよ！」

先に反応したのはリアだった。普通に受け流して終わるかと思っただけで意外にビックリしてるからこっちも驚きだ。

「いやいや、お父さんだっているから」

「それでもキロには危険だって！ 私も一緒についてっていい？」

私がいれば安全だとも言っようなリアの発言がすっごく自意識過剰でまたビックリする。というかどんだけ僕がダメだと思われるんだろう。……たしかにダメだけど。

「それはダメだよ、お父さんの負担が増えちゃうよ」

「私なら大丈夫だって！ キロだって守ってみせるよ！」

「そんなにキロを困らせるなよ、リア。もしリアと一緒に連れて行くことにするならリアの親の許可が必要になってくるだろ。リアは良くてもしリアの親は許してくれないだろ」

それに身分というものがある。

アークはあえて言わないでいてくれたことだが、リアを街の外に連れ出すにはおそらくとても手続きが大変だろう。

「それに魔物を甘く見ないほうがいい。大人でさえ街の外で死ぬことだってあるんだからな。キロのことはどうでもいいけど、リアが死んだら俺に対抗できるやつがいなくて困る」

最後に僕への悪口をつけるのを忘れないところがアークらしいが、アークが説得してくれたおかげでリアも諦めたらしい。「絶対気をつけてよね」とよく分からない、難しい注文をされた。

「アークは街の外にいったことあるのか」

リアはもちろん無いだろうから、アークに聞いてみる。でもこい

つはリア以上にしがらみが多いから難しいだろうか。

「もちろん無いに決まってるだろ。……とお前達以外には答えるかな」

「……どうやらアークはこっそり街の外に出たことあるらしい。悪い奴だ、見つかったらそれこそ大問題に発展するかもしれないのに。まあ深くは聞かないよ。どうだった？」

## 第24話「冷酷な戦士の中の微笑み（6）」（後書き）

なかなか話が進まなくてすみません。

なるべく無駄なところははしよりたいけど、そこが実は大事なったりするかもしれないのではしよれないのです。

感想や評価がありましたらお願いします。

## 第25話「冷酷な戦士の中の微笑み（7）」

「うむ……といってもチラツと見る程度でそこまで遠くには行っていないんだ。あまり離れると見つかってしまうからな、俺の場合」

「なんだ、使えねー奴だ」

「思ったことをそのまま言葉に出すなバカ。でも俺をもつてしても少しだけ怖いという気持ちがあったことは確かだ。あまり遠くまで行けなかったのも実はそのせいだしな」

なんでもないかのように自分のことを話すアーク。ここがこいのすごいところなんだろうと僕は思ってる。

「まあ次に外に出る時は堂々と魔物の4、5体でも捕まえてやるがな」

自信たっぷりなこの表情もこいつのある意味すごいところだ。

とりあえずその日の昼休みに2人に言われたことは「キ口は弱いんだから充分注意して外に出ろ」ということだった。そりゃそうだけど、2人と比べたらだいたいのカラスの人間は弱くなるんだからしょうがないじゃないかと文句を言いたい。

まあアークのほうは「俺はそこまで心配してないけどな。いつもみたいに逃げてれば安全なこと間違いなしだ」と毒を吐いていたけど。

毒というかは真実なんで甘んじて受け止めようと思う。

そういった感じでその後はつつがなく一日が進み、僕も街の外に出てみることに少しワクワクソワソワしながら、出発予定日の週末

へ向けて準備をすることにした。何を準備すればいいのかわからないけど、キャンプをしたり、魔物と戦闘になったりするのだからナイフとかを持っていくべきなのだろうか？

そういえば、前の世界でもキャンプなんてしたことが無かったから実際にどんなことをすればいいのかまったく分からない。大丈夫なんだろうか？

でもお父さんがいるから大丈夫だろう。

問題が起きたのは出発予定日の前夜だった。

「すまん、行けなくなった」

仕事から帰ってくるなりお父さんは申し訳なさそうに僕に向かって謝った。

「えっ!？」

喉から出た声は、そのまま驚きを表わす言葉となって出てきた。なんでなの？

「急な仕事が入ってしまった。明日からお父さんは隣のリファレンスに行かないといけなくなったんだ。本当にごめんな」

どうしても断ることができない仕事らしく、かといって部下に任せるわけにもいかず、結局自分が行くことになったということをお父さんは説明した。

素直に残念だと思う。

でもお父さんの仕事ならしょうがない。お父さんには仕事を頑張  
ってほしいし、僕との用事なんて優先しなくてもいい。外に出るの  
はいつだっていいのだ。

でもやっぱり残念だなー

「だが安心してくれ。お父さんはキロが安心して外にいけるように  
『強力な助っ人』を用意したからな」

そういつてお父さんは笑いながら僕の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「ええーっ！」

っていうか中止じゃないの？

第25話「冷酷な戦士の中の微笑み（7）」（後書き）

強力な助っ人って誰だ？

## 第26話「冷酷な戦士の中の微笑み（8）」

「お父さんの部下のメイリン・ダルクだ。お父さんの代わりにこのメイリンがお前と一緒に街の外に出てくれる」

翌朝、お父さんの隣に立ち紹介されたのは、この地域では珍しい黒く長い髪のとて綺麗な女の人だった。肌の色も少し濃いため全体的に黒っぽく（少し日焼けした日本の女子高生くらい）、前の世界でいうならばアジアンビューティーとでも表現すべき美貌で、前の世界ならシャンプーのコマーシャルとかに出てそう。

メイリン・ダルク      5番隊隊員、17才。

なんかちょっと僕のほうをジロジロ睨んでいる気がするが、きつと気のせいだろう。

機嫌も少し悪そうだけどそれも僕の思い過ごしに違いない。

「こっちはキロ、私の三男坊だ。さっき言ったように街の外で3日間面倒をみてやってほしい。ほらキロ、挨拶をするんだ」

お父さんがそういつて僕に促す、お父さんの手前ちゃんと自己紹介をしないと。

「き、キロ・フロントル、です。今日はよろしくお願いします」

挨拶はコミュニケーションを円滑にする上で大事なステップだ。第一印象は「その人と話したい」という気持ちを作る上で重要なものであり、その印象を構成するのは外見（不潔でないかどうか）と最初の挨拶だ。

誰だつて無愛想で挨拶もろくにできない奴とは話をしたくない。僕は言葉につまりながらも自己紹介をし、挨拶とともに頭をきっちり90度まで下げた。我ながらまあまあ良い挨拶ではないかと思う。

そう思いながら頭を上げてみた。

メイリンさんは先ほどと同じ用に僕をずっと見てた（今度はじつと目を睨みつけてるような感じだ）。やっぱり怒ってるんじゃないのかこの人？ まだ僕何も悪いことしてないよね？

「隊長」

やがてメイリンさんは静かに口を開く。ずっと見ていた僕ではなく、横にいる隊長　お父さんに対してだ。

「朝早くから何事かと思って来て見れば、要するに私に子守をしろということですか？ 三日間も」

いきなりきつい口調で怒りをあらわにした。依然として僕のほうを見てるからかなり怖い。嫌な汗がでてきたよ。というか今の時刻は昼前くらいだからそんなに朝早くというわけではないんだけど……

「まあ子守といえば子守だな。言い方を変えればキロと2人で3日間この街の付近の魔物の調査をしてほしいということだ」

「……それは任務……ということですか？」

「いや、任務じゃない。したがって給料も出ないし手当てもない。さらに言えば食料も現地調達だ」

えっ？ 食料を現地調達だなんて！

それは僕も聞いてないよ？ それじゃサバイバルじゃん！？

「……任務じゃないならそれは命令ではありませんよね。私は帰ります」

そういうとメイリンさんは後ろを向き、リビングを後にした。

「ちょ、ちょっと待たないかメイリン！」

あわてて追うお父さん。

いや、そりゃそうだろお父さん。

僕だってメイリンさんの立場だったら行きたくないよそんなの。

## 第26話「冷酷な戦士の中の微笑み（8）」（後書き）

助っ人は新キャラでした。

新キャラなのに早くも退場しそうです。

今回投稿が遅くなったのは、実は新キャラの名前を考えるのにすっごく時間がかかったからです。人の名前を考えるのが苦手です。誰か考えてくれませんか？（特に女性キャラの名前を、リアの家名とか、あとトニルとつるんでるチビの名前とか）

長々と続いていますますがもうそろそろ舞台は街の外へ、なんちゃって初めて冒険っぽいことをする主人公です。

そして次回からシリアスで暗い展開になる予定です。

## 第27話「冷酷な戦士の中の微笑み（9）」

「なんでしょうか隊長。私は休日を他人の子どもと過ごすほど暇ではないのですが」

リビングに戻ってきたメイリンさんは機嫌の悪いまま口を開く。

そりゃそうだ。誰だって自分の休日を邪魔されるのは嫌だろう。それにメイリンさんにだって休日にすることはいろいろあるだろう。

「いやいや、お前はどうせ家に帰っても寝るだけだろ」

「……」

呆れたように言うお父さんに黙ってしまうメイリンさん。本当に寝るだけかよ。

もうわざわざ今日メイリンさんで行かなくても、今度お父さんが暇になったときに一緒に行けばいいんじゃないだろうか。さっきからメイリンさんが静かに怒ってるから怖くてしょうがない。この人と一緒に外で3日間なんて絶対無理だって。

「まあまあ、そんなこと言わずに隊長の頼みを聞いてくれないか。それにこれは何もキロのためのキャンプじゃなく、お前にもためになると思ったから頼んでいるんだ」

「それは……どういう意味ですか？」

メイリンさんが怪訝な顔をして尋ねる。

確かに、あらゆる意味で僕のために街の外に出てみるのに、何かメイリンさんに関係でもあるのだろうか？

うーん、お父さんが何を考えてるのかわからないや。

「うむ。自慢じゃないがうちの子供達はおもしろい子たちでな、中でもキ口は特に変わった育ち方をしている。お前は真面目で頭が固すぎる上に少々危険なところがある。メイリンがさらに上を目指すのならそこは直すべきところだと私は考える。だからキ口と3日間行動を共にすることによって少しでもメイリンに良い刺激になればと思ったんだ」

「刺激……ですか……」

「そうだ。まあたった3日間、うちの子供と遊んだくらいで何かが変わるとは思わんが。ようはきつかけだな」

どうやらお父さんが考えていることは。僕とメイリンさんを一緒に行動させることで、僕は街の外という刺激を体験し、メイリンさんは普段関わることの無いようなタイプの人間と接することによって、彼女の世界を広げようというものらしい。

それにしてもそんなに僕って変わった性格をしているのだろうか？確かに他の人とは少し考えることが違うかも、とは思ったことがあるがそんなに変な性格はしていないと思っているんだけど。でも前の世界でも散々変わっていると言われ続け、この世界でも変わっているといわれているのだから他の人から見れば変わっているのだろう。問題はそれが悪いものなのか良いものかだ。

どうやら根本の性格というものはなかなか変えられないものかもしれない。

「メイリン、お前が今以上にいろんなことを考えることができるようになったら、自然と上に行くことになるし、そうならばお前の望んでいる事だってできるようになるさ」

そう言ったお父さんの笑顔に押された形で、メイリンさんは僕と街の外に出ることをしぶしぶ承諾し、いよいよ僕は街の外に出ることになった。

## 第27話「冷酷な戦士の中の微笑み（9）」（後書き）

もう27話も書いてるのになんだかまったくストーリーが進んでないですね。今回のシリーズが終わったら一度整理、まとめをしようかと思っています。

よく考えたらメイリンって中国っぽい名前だ。メアリーにしとけばよかったかも。

## 第28話「冷酷な戦士の中の微笑み（10）」

### 王都ライブチ郊外

様々な商店が並ぶ大通りを抜けると大きな門が見えてくる。

基本的に有事でもない限り開かれることの無いそれは、外界とこちらを切り離すように24時間兵士によって見張られており、荘厳な雰囲気醸し出している。

そんな大門の横に二回りほど小さな門があり、人や馬車はそこから行き来することができ、手続きを済ませ、門を抜けるとそこからは今までとはまったく違った景観が現れる。

最初に外に出た感想は、思ったより魔物は直ぐ出てくるわけではないんだというものだった。

門を出ると景色は大きな道がひとつあるだけになる。

街の周りが見晴らしの良い草原になっていて、ぱつと見たところ魔物がいる感じはしない。前の世界のゲームなんかじゃ街の外に出て直ぐに魔物に遭遇したりするけど、魔物だって生きてるからわざわざ人間とエンカウト率の高い街の周りに来ることはないみたいだ。

「ここら辺の魔物は弱く性格も臆病なものが多いから、めつたに草原まで入ってくることはない。だが森は魔物の巣窟だ。特に道から外れればそれだけ魔物に襲われる可能性は高くなる」

メイリンさんの言葉とともに僕とメイリンさんは道を進む。

草原をある程度進むと目の前の道は沢山の木々に覆われたところを進んでいく。道は少し細くなり、先は真っ暗で何も見えない。全体的に暗く、静寂と緊張感が森全体を包みこんでいるかのようだ。

元から言葉数の少ない僕らだが、さらに会話無く森の中の道を突き進んでいく。

メイリン「……」

キロ「……」

演劇の台本ならこういう書き出しになるであろう沈黙が、そのままもう1時間も続き、出発のときは真上にあった太陽は少し傾きかけている。

メイリンさんが喋らないのは……たぶん出発前のお父さんとの会話を見る限りいつものことなのだろう。話ヘタそうだし、自分から話しかけることはなかなか無いのではないだろうか。

じゃあ僕が話しかけなければ会話は生まれてこないのだが、なんというか話しかけるきっかけが見当たらない。あるにはあるのだが、今話しても無視されそうな気がするのだ。

まだ怒ってそうだし。

僕の頭の中には出発する前のニツカお兄ちゃんとの会話が蘇る。

「メイリンと外に出るって本当か？キロ？」

部屋で出発の準備をしていると、ニツカお兄ちゃんが僕の部屋にやってきた。仕事は今日は無いようで、いつもはピリピリしているお兄ちゃんも今日は少し穏やかだ。

「うん、そうだけど？」

僕が肯定の意を告げるとニツカは少し難しい顔をした。何かあるのだろうか？

「そうか……とにかく気をつけるよ」

何をだろう。その後に続いたニツカの説明はこうだ。

「俺は、あいつと同じ学年でずっと同じクラスだったんだが、あいつはとも変わった奴だな。文武共に優秀で常に俺の学年ではトップを維持。学校を卒業した後も、普通は俺のように平の兵士から軍に入るんだが異例の大抜擢で親父の隊に配属されることになった。ただ団体行動が苦手というか、人との接し方が苦手というか、その上気に食わない奴は平気で制裁するような奴なんだ」

つまり結構な人間嫌いな人のようだ。

その後ニツカはメイリンがどんな人間を実際にあつた事件を元に教えてくれた。

曰く、学校に入学してから卒業まで1人も友達を作らず事務的なこと以外を誰とも話したことが無いだとか、集団戦闘訓練なのに一人で参加してそのまま相手のチームを全員行動不能にしたとか、いじめの現場を見て苛めっ子達を半殺しにしたあと気に食わなかった

のか苛められっ子までボコボコにしたとか。聞いているだけで震えが止まらない話ばかりだった。

とにかく怒らせないようにしないといけない。

それだけは心に誓った僕だった。

「そろそろ道から外れるぞ」

「えっ、は、はい！」

いきなり現実に戻されて前を歩いているメイリンさんを見るとそろそろ森の中に入っていくようでこちらのほうをまったく見ることなく森の中に突き進んでいく。

これからが冒険の始まりだ。

## 第28話「冷酷な戦士の中の微笑み（10）」（後書き）

結論から言つと作者は暴力的なヒロインが好きなのかもしれません。

## 第29話「冷酷な戦士の中の微笑み（11）」

道を外れて森の中に入っていくと、これが思った以上に歩き辛い。地面は木の根つこや大きな石でごつごつしているし。僕の背丈以上の草木などがところどころに生い茂っているから前がまったく見えなかったりする。

僕はひたすら前を歩くメイリンさんに遅れないようついていく。

そういえばこの世界の魔物ってどういったものなんだろう。

絵本なんかにはドラゴンみたいなものや鬼みたいな熊みたいな魔物なんかが出ていたけど、まさかいきなり街の近くの森でそんな魔物は出てこないだろう。それともやはり最初はスライムだったりするのだろうか？

「メイリンさん、この辺りにはどんな魔物がいるんですか？」

「……」

しかし、僕の質問はメイリンさんに届かなかったかのように返事は返ってこなかった。もしかして声小さかったかな？でももう一度質問するのも恥ずかしいし。

「あ、あの……」

「この森で出てくる魔物は大抵がサギーという、リスを大きくしたような魔物だ。比較的大人しく動きも鈍いから実践の訓練としてはちょうどいいな。ほかにもいくつか魔物はあるがあまり見かけることは無いから、もし遭遇したらその時に教えよう」

一応僕の声は聞こえてはいたようだ。でもどこかつっけんどんな対応はやはりメイリンさんとのコミュニケーションがまだ上手くい

っていない事を示している。

というか本当にこの人は軍の中で上手くやっているのだろうか？  
お父さんと話している時はまだ普通に会話できていたけど……いや、  
思い出してみれば喋っていたのは主にお父さんだったな。……会話  
といっても上司と部下の会話だったし、お父さんは話を盛り上げる  
のが上手いしなあ。

ちなみに、さすがに素手で戦うことはできないので今僕は武器を  
装備している。僕の腰に装着されたホルダーに入っているのはサバ  
イバル用のナイフだ。30センチほどある刃はずっしりと重く、鋭  
い刃は嫌でも見入ってしまう。

もちろん学校では武器を使った訓練はまだ行なわれていないので、  
これが初めての武器となる。前の世界でもカッター以外の刃物なん  
て早々見る機会は無かったから、僕が使う刃物としてはこれが最上  
級のものになる。名前は「初心者のためのお手軽サバイバルナイフ」  
らしい。

ちなみにちなみに、最初おとうさんは僕に自分が普段使っている  
剣を持たせようとしたらしいが、家族全員が「キロに使えるはずが  
無い」とつつこんでなしになった。当たり前だ。

お父さんからは「メイリンに武器の使い方を教わると良い。あい  
つは武器の使い方が上手いからな」といつてたけど、今の状態じゃ  
あ絶対に教わることはできない。まず会話が續かないもん。

「動くな」

と歩いているといきなりメイリンさんが小さな声で命令し、僕の  
前を手で防いだ。

すぐさま立ち止まってメイリンさんを見上げる。

メイリンさんは前を凝視したままだ。

「あそこにサギーがいるのが分かるか？」

メイリンさんの視線を追うと10メートル先の木の下に動く生物  
が見える。先ほどの説明のようにリスをでつかくしたような魔物で  
ちよつとかわいい。だけど想像よりは結構でかかった。多分中型犬  
くらいはあるんじゃないか？

「まずは私がサギーを撃退してみせる」

そついうとメイリンさんは深く息を吐いた。

辺りが少しだけ静かになる。

第29話「冷酷な戦士の中の微笑み（11）」（後書き）

第30話「冷酷な戦士の中の微笑み（12）」（前書き）

ちよつとだけ残酷な描写があります。

### 第30話「冷酷な戦士の中の微笑み（12）」

静かに。

ゆつくりと、それでいて無駄なく滑らかな動作で鞘に収めていた武器を取り出す。現れたそれは僕のナイフがおもちゃに見えるほど圧倒的な殺傷能力を持ったサーベルだ。すらっと伸びた細身の方刃の刀は「肉を切り、生物を殺す」という非常にシンプルな命題を実行するために、ただ一つの余分な装飾無く、肌寒いまでの存在感を発しながら在る。

メイリンさんはそれを構えると一歩、また一歩とジリジリ進む。目は目標を定め外すことなく、無表情だった顔はさらに感情が失われていく。緊張した空気だけがどんどんその場を圧迫していくようだ。

一方サギーはこちらに気づくことなく、餌なのだろうか、どんぐりのようなものを前足でとって鼻に近づけている。仕草は本当にリスと変わらない。……大きくさえなければ。

トクントクントクントクン

自分の心臓がその瞬間を今か今かと待ち望んで　いや、待ち望んでいるのではなく早く過ぎてくれと懇願しているのかもしれないが、とにかく僕の体は一切の運動を停止し、この目でこの耳でこの鼻で、体中の感覚、神経全てを総動員してメイリンさんとその先にいるサギーと呼ばれる魔物の全てを捉えようとしている。

汗なんて感じる事ができない、果たして今自分が立っているの

か、目をちゃんと開けているのかでさえ疑問なほど意識が対象へ飛んでいる。まるで僕という「感覚」だけがその場に存在しているかようだ。

これから起こることはこの世界の現実だ。

前の世界では大半の人間がマンガやゲーム、スプラッタ映画などでしか触れることができなかった虚像という現実が、この世界では実際にありふれたものとしての現実として確かに存在する。それを今から僕は突きつけられることになる。

僕はどうなるのか。

僕はどうなるのか。

心臓はやけに早く、強く。僕の意識を動かす。

トクントクントクントクントクントクントクントクントクントク  
ントクントクントクントクントクントクントクントクントク  
ントクントクントクントクントクントクントクントクントク

それは一瞬のことだった。

視界からメイリンさんが少し霞んだとおもった瞬間いつの間にかメイリンさんはサギーの方へと駆け出していた。

いや駆け出すというよりは飛び込んだと言ったほうがいいだろうか。メイリンさんとサギーの距離はその一歩で、一瞬でなくなる。ずっと見ていた僕が一応遅れるくらいだ。これから餌を食べようとしていたサギーには自分の注意していない所から急に人間が現れるとは思って無かっただろう。何も反応することなく餌を手にとったままだ。

流れるような動きで手に持ったサーベルを上段に構える。

そしてそのまま一気にサーベルを振り下ろした。

ドクンツドクンツドクンツドクンツ

もはや鼓動は爆撃のように僕の中を支配している。目の先にはただただ赤く振り下ろされたサーベル。滴る血、溢れる赤黒の液体。

そして今はもう動かなくなってしまった「物体」

メイリンさんは何でも無かったかのように軽くサーベルを振り、血を払うと、踵を返してこちらに戻ってくる。

その表情は先ほどと変わらず無。

彼女にしてみれば今の光景なんて何十回も、何百回も、見て自ら実行してきたことなのだろう。今更驚くことも、何らかの感情を宿すこともない。もしかしたら最初の時だって感情を揺らすことは無かったかもしれない。

ただ怖かった。

僕は平然と戻ってくる彼女に恐怖を感じてしまったのだ。

「こんな感じでサギーが餌をとっているときに、死角から入れば気づかれること無く攻撃できる。まあ気づかれたとしてもウスノ口だから問題はない。ただ体当たりは重いし、噛み付かれると物凄く痛いからそこは気をつけることだ」

そういうとメイリンさんはこちらに背を向け歩き出した。次の獲物を見つけるため。そして「今度は実際にお前がやってみろ」と告げた。

その言葉に僕は返事を詰まらせた。

いや、実際には返事をしたのかもしれない。もしかしたらうめき声が出たくらいなのかもしれないがどうなのかは分からない。

太鼓のように心臓は全身を打ち砕いていたし、耳はキーンとして頭はボーとして体は重く、汗は冷たかったし、舌はヒリヒリして地面は回っていた。

それでも何とかメイリンさんにはついて歩くことができた。

メイリンさんはサギーの死体にかまわず通り過ぎ、森の奥へと進んでいった。僕もそれに倣い、サギーだった物体を横に通り抜ける。血だらけになったそれは不気味な存在感を出していた。

一時でも生を与えられていたものが、その生を失ったときだけに現れる「喪失」その情動エネルギーはとてつもないものだ。

傷が痛々しさを撒き散らしているように。死は恐怖と悲しみを生み出す。

何故かサギーを死に至らしめたその大きな傷が僕の目から中々離れなかった。

ぼんやりとした中で唯一思ったことは、やっぱりゲームのようにはいかないのだということだ。

死んだサギーは傷もそのままに、消滅することなくそこに置き去られている。やがてそれは他の魔物に食われ、骨になり、土に還り、他のものに少しばかりの影響を与えていくのであろう。

「止まれ」

しばらく歩いているとまたメイリンさんに止められた。辺りは既に少し暗くなっている。いったいいつから暗くなっていたのだらう。

「あそこにサギーがいる」

メイリンさんは声を潜めて言う。

見ると先ほどと同じようにサギーが一匹、草の中でもぞもぞと動いている。

「最初はお前1人でやってみろ。大丈夫だと思うがもし何かがあれば私が出る、気負わずに行け」  
そういつて僕を前へ促した。

ついに始めての魔物退治（ハンティングだろうか？）だ。

ホルダーからナイフを取り出そうとするが、ホルダーの金具が引っかかりなかなか取り出せない。

何でだろうと思いつながらようやく取り出すとその理由が分かった。ナイフを持つ手はこれ以上ないというくらい震えていたのだ。

第30話「冷酷な戦士の中の微笑み（12）」（後書き）

第31話「冷酷な戦士の中の微笑み（13）」（前書き）

ちよつと暴力的なシーンがあります。  
ちよつとグロい表現？があります

### 第31話「冷酷な戦士の中の微笑み（13）」

「ううう……」

声にならない呻きが腹のそこから溢れてくる。

全身が総毛立つとはこういったことなのだろうか、あきらかに体の感覚がいつもと違うのだ。

体が思うように動いてくれない。

動きたくない。

サギーを見つめる視界は薄暗くて狭く、周りを見渡す余裕なんて無い。気持ち悪いほどに胸は鼓動を繰り返し、舌は乾ききって、あの種の浮遊感のようなものが体を支配する。

時間がどれくらいたっているのか分からないくらいに気が張り詰めていて、早く動かなければいけないのに、サギーを倒さないといけないのに、思考がぐるぐると回っていく。

早くしないと

早く動かないと

草の中でもぞもぞ動いていたサギーはしばらくすると、草の中を出てこちらの方へ歩いてきた。

まだ僕達のことには気づいていない。結構鈍感なのか、周囲への気を配っていないのか、動きはどこかのそのそとしている。

このサギーは生きているんだ。

そして今から僕はこいつを殺す。

サギーはぴたっと止まると土に鼻をこすりつけている。何かの匂

いをかいでるのか。

僕との距離はちょうど15メートルほど。

先ほどのように何か食べ物に気をとられているわけでもないサギーはいくら木が生い茂っている場所だからといってもあと少しでも近づかれれば気づかれるだろう。

そうなる前にこちらから攻撃しないといけない。  
サギーにこのナイフで傷を与えないといけない。

「どうした、早くしないと逃げられるかもしれない」  
小さく、呟くような声が、それでいて僕の耳にははっきりと聞こえた。

早くしないと

気づいたときは一歩

足を踏み出していた

うわああああー！

踏み出した足は止まらない。

そのまま一歩、また一歩と小さい歩幅で進むと、僕の体は一気に駆け出した。準備が整ってないだとか気持ちが悪まってるだとか、そんなこと考える間はなく、ただ早くしないと、早くサギーに攻撃しないといけないという気持ちが体を突き動かしていた。

さっき見たメイリンさんのような余裕のある動きも集中した雰囲気もそこには一切無い。ただバカのように突進して周りをまったく省みず、その姿は無様の一言に尽きるかもしれない。

しかしそんなことも今の僕には一切考えられない。とにかく早くしないと、早くしないといけないのだ。

サギーの目の前に来た。

いや、僕がサギーの前に飛び込んだだけなんだけど。

サギーは土から顔を離すと、そのまま上に上げた。自然と僕と視線が合わさった…… ような気がする。そりゃああんなにドタバタ突っ込んで来たら誰だってびっくりして顔を上げるだろうけど。

早く

サギーより早く

ナイフを握っていた手を思いっきり振り上げる。慣れない重さを持つそれは予想以上に振り上げたことによる反動をもち、思わず少し仰け反る。

少し体勢を立て直す。

後はこれを振り下ろすだけだ。

これを振り下ろして、サギーを斬る。

早く殺さないと。

ナイフを振り下ろし、サギーを斬り付けないと。僕の力じゃ一回斬りつけるだけではサギーは死なないだろう。何度も何度も斬り付けないと。サギーはぐしゃぐしゃになって死ぬだろう。皮はもちろん、肉も骨も何度も叩ききり、内臓は飛び出て、原型もなくなるだろう。もちろんあたりは血だらけ、僕だって全身血まみれになって、独特の嫌な匂いに包まれるのだろう。

でもそれでいいんだ。

それでいいはずなんだ。

でも体はその先へ動くことはなかった。

「あ……」

固まってしまった体の先でサギーはこちらを睨みつけるように見ると、丸くなるように身をかがめる。全身に力を貯めているのが分かる。尻尾の毛が逆立っていて、怒ってるのだろうか？ それとも急に現れてナイフを振り上げている僕をみてビックリしているのだろうか。

そんな風に一瞬膠着していると、次の瞬間サギーが飛び掛ってきた。

「バカ！避けんかつ！」

後ろから叫び声。僕は横へと吹き飛ばされる。

メイリンさんが僕を横へ押し付け、サギーの攻撃を切り捨てる。一線、サギーが真つ二つになる。

血しぶきが、僕の体を真つ赤に染める。

視界が真つ赤に染まる。  
血が目に入ったのか？

まるで世界が真っ赤に染まったように。血に染められてしまったように、体が重く重く地面に引きつけられ頭が回らない。

息が苦しくて苦しくてしょうがない。

なんで？

何でなんだろう？

### 第31話「冷酷な戦士の中の微笑み（13）」（後書き）

戦闘の描写がやっぱり苦手なんだと思います。

一応主人公のいろんな気持ちだしてみようとしたのですがどうでしょう？

よろしかったら評価、感想をお願いします。

### 第31・2話（前書き）

非常に気持ち悪い文章になってます。  
あと暴力的な表現も少しだけあります。

読まなくても本編に差し付けないと思いますので、暴力的な表現が  
苦手な方は読まないことをオススメします。

第31・2話

暗い

赤い

いじつはどいっだ？

辺りは真っ暗で

それなのに明るくて赤くて

僕は自分が立ってるのか座っているのかすらよく分からない

ただふらふらと浮いているようで

ただくるくると回っているようで

「先生はそうやってまた誰も助けられないんだよ」

どこからか声が聞こえる。

それは遠くから聞こえたようで、耳の直ぐ側から聞こえたようで、頭に直接響くのに、ぼんやりと余韻も無く消え去ってしまう。

と、いきなり目の前に現れた女の子が口を開く。

「何度も何度も……それこそ何百回も何千回も考えて、悩んで、苦しんで……それでも誰も救えない。何度も何度も傷つけて、壊して、苦しめて……それでもバカみたいに誰かを救おうとして……何度も何度も……何度も何度も、間違えて間違えて……私みたいな人間まで面倒みて……無駄なのに、無駄でしかないのに……無駄なんだよ……先生のしてることは全部……」

混濁した真つ黒な瞳。それはもはや目ではなく落ち窪んでしまったかのように顔全体を暗く映し出す。

髪はボサボサでところどころ長さが違う。来ている服はところどころが破れていて、ファッションなのだろうか、表情からはなにを考えているのかわからない。

いつのまにか女の子は目と鼻の先まで近づいてきていた。  
僕の足は鉛のように動かない。

そのまえにここはどこだ？

彼女は誰だ？

「先生は無駄なことしかない……いつだっていつだって……私みたいな人間にはそれが無駄だと分かっているのに、それを諦めきれないから……無駄なあがきをする。……先生って滑稽だよ、滑稽でかつこ悪くて大っ嫌いだよ……だけどそんな先生だから……私みたいな人達は先生を頼ってしまうんだよ……先生だけしかないから……」

「結局助からないのにね」

ふいに

彼女はどこからかカッターを取り出す。

ビクツつとするけど動けない。  
動いたからといって何をしようとしたのかは分からないけど。  
俺は……

女の子はカッターを自分の腕に押し付けると

ゆっくりと

ゆっくりと

まるでスローモーションでもみているかのようにゆっくりと斬り  
つける。

血が出る。

カッターによって出来た一筋の線は、想像以上にグロテスクで心  
を落着かなくさせる。

何でだ？ 何をしたいんだ？  
何でそんなに笑顔なんだ？

「これが先生の『結果』」

クスクスと自分から流れる赤を見つめ続け、それを俺に見せ付けるように目の前に差し出す。

「先生が導いた結果であり、私が出した答えだよね……ようやく先生が言っていたことが分かったよ。……もう遅いけど……ね……要するに私も先生もしたいことをしすぎたんだよね……」

何がおかしかったのか、アハアハとだらしなく口を開く。

何だよこれ？

怖い……

すると女は俺の肩を掴み押し倒す。

突然のことに受身を取る暇も無く頭から落ちる。

目の前には女の顔。

まるで野獣のように顔をゆがめている。

「ねえ！！ 先生は私をどうしたかったの！？ 分かってたんでしょ？ 何もかも……いつものように全て知ったつもりでいたんでしょ！ ねえ！ …… もう辞めてよ……これ以上苦しめないで……ワタシヲ……苦しまないでよ……全部先生のせいなんだからね！ 先生が悪いんだよ……先生さえいなければ！」

先生のせいだ！

先生が悪いんだ！

お前のせいだ！

オマエさえいなければ！

オマエが！

オマエガ……

もはや視界の全てを奪うそいつの表情は怒りに満ち溢れているようであり、苦しみに刻まれているかのようにもあり、見るものをただただぞつとさせる。

女はひたすらつぶやく  
オマエのせいだと

違う、私は……私はただ……たかった……

口から漏れそうになった言葉は、そのまま地面に落ちてしまったかのように掻き消える。

私を

「助けてよ」





テ……タスケテ……タスケテ……たすけて……タスケテ……タスケ  
テタスケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテタ  
スケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテ……タ  
スケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテタスケ  
テ……たすけて……タスケテ……タスケテ……タスケテ……タスケ  
テ……たすけて……タスケテ……タスケテタスケテ……タスケテ……  
……タスケテ……タスケテ……タスケテタスケテ……タスケテ……タ  
スケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテ……タ  
スケテ……タスケテ……タスケテ……タスケテ……

悲痛な叫びは続いた。

いつまでもいつまでも

### 第31・2話（後書き）

前書きでも書いたとおりとても気持ち悪い文章にしてみました。

気味の悪さが伝わってくれればと思います。

本編にあまり関係ないと書きましたが、何でしょう？ 主人公の心理描写とでも考えていただければと思います。

あまり関係ないけど、この主人公の心理はこのさき重要になるとかならないとか。

次から「冷酷な戦士の微笑み」の山場に入っていきます。たぶん…

…

### 第32話「自動思考の長い夜（1）」

気がつくと空は真っ暗闇に襲われていた。  
馬鹿みたいに多くの星達とひととき大きく光る月に僕の顔は照ら  
されていた。

（この世界でも月は月と呼ぶのだろうか）

あまり上を見ることの無い世界に慣れてしまった僕はガラにも無  
くそんなことを考えてしまった。

起き上がって間もなくメイリンさんが作ってくれた料理を口に運  
ぶ。家から持ってきたパンといつの間に手に入れたのかウサギか何  
かの肉を焼いたものだった。

最初はサギーの肉かと思ったが、食べられる魔物は少なく、サギ  
ーも食べられない魔物の一つらしい。何でも魔力を持つ生物の肉は  
例外を除き、人間の体内に入れると害になるのだとか。

「お前はビビッてサギーを倒すことが出来ず、サギーの血を見て失  
神したんだ」

メイリンさんは僕が気がつく前後の説明をその一言ですまし、あ  
とは食事を素早く口に運ぶと消えないように焚き火を崩してそのま  
ま寝てしまった。大丈夫かと思うが、そもそもサギーくらいしかこ  
の辺りにはいないのだろうし、メイリンさんからすればこの辺りで  
襲われてもどうってことないのだろう。

もちろんそれ以上の話は聞けなかったしできなかった。

メイリンさんはどう思ったのだろう？ 心底呆れているのかもしれない。

攻撃が出来なかった。

攻撃しようとしたけど、しようとしたのに、その瞬間体が動かなくなった。

何でだよ……

いや、あれだよ？ 今まで攻撃なんかしたくねえとか言ってきたけど、別にしようと思えば普通に攻撃魔法なんてぶっ放すことくらいできるし（初級魔法ならある程度、中級魔法ならばちまちま使えるというか習得させられた。リシュナ先生とリアに）、戦闘訓練だつてまじめにやればリア……は無理だとしてもアークと互角以上に戦える自身だつてあるし。初めての刃物だつたつても結局振り下ろせばいいだけで、相手はまったく動かなかつたんだし余裕で倒して経験値ゲットでお金も手に入れて、ついでにメイリンさんと上手く話せるようになったらお父さんもリシュナ先生も見直せてアークは悔しがってリアは喜んで、でもやっぱり戦闘訓練はしないよ、だって（相手が）人間だもの。人間相手に攻撃なんてパスカルもびっくりな古臭い手法の伝心なんて人生2回目の僕には無理だし、攻撃しなくても余裕で相手の攻撃を避けれるから楽勝だし……

長々と書いたけど要するに攻撃する気がないだけで、やる気さえ出せば僕は結構強いんだ。

とか心の奥底では思ってたの。

結構本気で。

でも攻撃できなかった。

やる気があればとか魔物相手ならとか、やらなきゃこつちがやられるだとかいう考えの前に僕は一切動けなくなつたのだ。

今までの言葉がこぼれ落ちる感覚。

何で僕は攻撃できないのか。

そして何故今まで攻撃しないのは自分の意思だと思つていたのか。それに血をみて失神するなんて我ながらすつごく恥ずかしい。

なんだよ失神って、今まで血なんて散々（自分のを）見てるのにたかが魔物から出た血ぐらいで気を失うのだろうか？

初めての実践で緊張しすぎたのかもしれない。でもそんなに緊張してたかな？ わからない、あの時の戦闘をはつきりと思い出すことはできないし、あの時の僕はあせって飛び出した結果見事に返り討ちにあいそうになるという、いかにもダメな脇役のような形だっただろう。

そう考えると気を失つたのはやっぱり緊張しすぎてたのかもしれない。

でも、うーん……気絶かー

「情けないなあ、僕はいつも……」

そうもらした言葉は闇夜と共に静かになり、僕は未だに答えを捜し求めようとする心と何故かズキズキとうずく頭を抱え、ようやく

眠気を感じる頃には夜が明けるのではないかと不安になるほど時間が経ってしまったのだった。

翌日、太陽が出てから大分時間がたって僕の2日目は始まった。起きて、顔を洗う。

食事の準備をしてから（家から持ってきたパンと果物）メイリンさんを起こす。

ご飯を食べて昨日寝ていた場所を片付けて出発。

昨日の失敗を踏まえて、サギーを探す前にメイリンさんから武器の使い方を一通り教わり、魔物との戦闘の仕方を教えてもらう（メイリンさんは端的にしか言わないからなんだか教科書を読んでもみたい）。

一通り教わった後はすぐさま実践。サギーをひたすら探す。

その結果この日はサギーを8体見つけた。

でも結局その8体に僕は攻撃できなかった。

何度やっても、何度対峙しても。

### 第32話「自動思考の長い夜（1）」（後書き）

結構分量書いたと思ったのにそんなに長くなってないのでびっくりです。

この話からタイトルを変えます。

というか「冷酷な戦士の中の微笑み」シリーズが思ったより長く、話数が多くなりそうなのでタイトルを分けてようと思います。

要するに「冷酷な戦士の中の微笑み」自動思考の長い夜」のような感じで考えていただければよいのではないかと。

それに伴って前の「冷酷な戦士の中の微笑み」のタイトルも変えます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4760s/>

---

異界サイコロジック

2011年9月10日09時30分発行